明治卅六年四月五日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行

家庭雜誌

第四巻

第九號

明治三十九年九月一日發行

Dai 4 Kan. **KATEI ZASSHI** Dai 9 Gō.

由分社

東京市麹町區元園町壹丁目廿七番地



クラブ洗粉
CLUB WASHING POWDER
最も善良なるトイレットとして愛用せらる
此のクラブ洗粉をクリモラとミルク及び卵と
舶来石鹸の美妙なる四原料のポーダーを以て
謹製せられたる
帝國化粧品倶樂部
總代理店 中山太陽堂
神戸本店
大阪支店

未だ本誌を讀まざる婦人ありや？

日本第一

婦人世界

實用專一

九月三日發行　毎月一回　第九號　一冊拾五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共九拾錢　一年分一圓七拾五錢

口繪
◎山階宮姫宮若宮殿下御影◎
◎花摘る少女◎湖畔の絶景◎
◎名家新婚寫眞◎其他數枚◎

彩色石版　中澤弘光
繪手本　跡見花蹊

◉**如何なる婦人が東郷大將を產み乎**（母たる者は讀め）（千古の大教訓！）
△雄々しき氣象△家庭教育の大苦心△戰時の覺悟△平時の決心
△其慈心愛臨△思慮の周密△珍らしき婦德△其健康法

◉**婦人は如何に寫眞を撮るべきか**（月亭）
▲見合ひの寫眞は如何に寫すべきか
▲寫眞の註文は如何にすべきか
▲小兒の寫眞は如何に寫すべきか

◉**弦齋夫人の料理談**

手輕な御馳走
△里芋は如何に料理するか
△彼岸の御馳走は何が宜きか
△油揚は如何に料理するか
△鯖は如何に料理するか
△牛蒡は如何に料理するか
△梨は如何に料理するか
△葛煉りは如何に作るか

◉**初秋に於ける育兒の注意**
△寢冷えは如何に豫防すべきか
△秋口は何の病氣に罹り易きか
△食物は如何に注意すべきか
△母體は如何に注意すべきか
子を愛する母は讀め（加藤ドクトル）

◉**消渴は如何に豫防すべきか**（伊庭學士）
本誌愛讀者に婦人病患者なし
◉我が家の貯金實驗……秋山錦子
◉淸國婦人の見たる日本人の生活……
◉男爵**高木博士の家庭**……

婦人の日常生活法　村井弦齋

▲衣服は如何に着換ふべきか▲婦人は何を嗜むべきか▲晩食は如何に用意すべきか▲食物の分量は如何にすべきか▲食物の性質は何が宜きか

▲食事には何の作法があるか▲食物は如何に消化さるるか▲水は如何に飲むべきか▲菓子は如何に食すべきか▲食後の含嗽は如何にすべきか

日本國中如何なる婦人雜誌を探しても斯くの如き大文字はありません

發兌元　東京京橋區南紺屋町十二番地　實業之日本社（郵便振替貯金口座參貳六番）　賣捌　全國各地書店

前附一

歯科治療 自午前八時至午後六時

神田區須田町二十六番地

歯科醫 吉瀬才市郎

勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意
晝間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

眼科診察 毎日午前

京橋南佐柄木町五
（電話新三四五八）

川上眼科院

外科皮膚病 梅毒痔瘻 **外**科的婦人科尿道器械的療法

診察 午前九時より十二時まで

東京 新橋際出雲橋 **加藤病院**

院長 獨國醫學士 **加藤時次郎**

分院 横濱神奈川臺。火木土午後三時至六時
小田原海岸 毎月曜午前中

産科婦人科

朝長鷹二郎

横濱市眞砂町二丁目廿六番地

診察毎日午前

佛西語
エスペラント語 教授

教授方法は總て個人的となし、時刻は晝夜に係はらず便宜協定す。用書亦隨意なり。束脩不要。

月謝金貳圓

東京牛込區市谷田町二丁目廿二番地

大杉榮

九月五日第一期第一號發兌 目下入會の最好機 希望者は至急申込まれよ

親しく農業に從事するもの、講堂に上りて博士學士の高說を聞く能はざるもの、乞ふ速に本會へ來れ

講師は農科大學教授農事試驗場技師博士學士等四十名

學科は本科參考科を通じて三十余科、外に農家農學者等の必ず見ざる可らず讀まざる可らざる科外講演等を毎號に滿載す

（通信教授）

日本農藝學會

農學講義

二年卒業 全科講義錄は毎月二回發兌し一冊は菊判百五十頁以上

會費（一月分四拾五錢 六月分貳圓四拾錢 一年分金四圓五十錢（見本は郵券廿五錢） 爲替は東京員砂局宛受取人は本會宛 切手代用は雜誌代金の外は不可とす）

講述は[illegible]に實用的の者なれば凡て應用の點に注意し高尙なる學理も卑近の例證に依て說明し直に實用し得可く[illegible]者は何人も容易に了解し得る實地[illegible]

詳細規則書は御申込次第進呈

▲月刊農學雜誌 九月一日初號發兌、本多博士八鐵岩國大工[illegible]其他老農大家執筆、一冊三錢五厘十二冊金[illegible]

東京市本郷區弓町一丁目二

日本農藝學[會]



家庭雜誌

第四卷第九號

明治三十九年九月一日發行

糸瓜

彦

△數年前、白金の里に住んで居た時、隣の屋敷に小さな藁屋があつて、其の屋の棟に糸瓜が這ひあがつて、其の棟の一角を中心として面白い恰好に這ひ廣がつて、其の青黑い葉の間に鮮かな黃色の花の咲いて居るのを、每日我が書齋から正面に眺めて居た事があつた。其時以後、予は糸瓜と特別の交りを結んだ。尤も其の以前より、絲瓜の實の凡そ三尺もあらうといふのが、ブラリ、ブラリとさがつて居るのを見て、深く其の俳諧趣味に打たれた事もあつた。

△此頃、我家の門の側の竹垣に、朝顏と共に糸瓜が這ひあがつて居る。そして每日々々朝顏も咲く、糸瓜も咲くが、然し予は此の糸瓜の花が、彼の美花を以て稱せらるゝ朝顏に劣るとは決して思はぬ。實はまだ最も大きいので三四寸、小いのは花落がしたばかりであるが、既に何處やらに他日の長大を想像せしむるに足る所がある。要するに予は糸瓜の知己を以て**自ら任じて居るのである。**

育兒所感（續）

中尾清太郎

其四　●●●●小兒と破壞

小兒は手の觸るゝもの、力の及ぶ所、何にてもあれ、先づ之を破壞せむと試むべし。薩摩兵兒ならねども、『人觸るれば人を斫り、馬觸るれば馬を斬る』の概は、小兒が先天に享けたる所にして、夙に彼の衷に磅礴せる氣象なるを見る也。此氣象は小兒が發達の徑路に於いて、必ず一たび劃する一時期なれば、養育者たるものは、豫め之を覺悟して、濫りに彼の自然なる發展を沮止すべからざるは勿論、之を保全し、之を薀蓄して、他日の大噴出大運動に備へしめざるべからず。是れ彼の爲に、勇を行ふの力なり。躊躇を排するの刺擊なり。彼の内部生活をして外に活躍せしむる激勵者なり。而して客觀より言へば、彼は踰越節に先行する破壞者なり。神の恩寵を失ひたる者——不義なる者は、悉く彼の爲に滅ぼされむ。

但かの瑣々屑々たる者、眉を顰めて曰はむ、小兒の爲すが儘に放任し置かば、彼の周圍には完きもの、遂に一も無かるべし。これ我等の堪ふる所にあらずと。されどこは寧ろ喜ぶべきの沙汰にあらずや。斯かる元氣旺盛なる小兒の將來は、いかに賴母しきかな。

小兒が溫順にして、お手々を膝の上に置き、靜かにお飯の煮ゆるを待つやうなる有樣にては、彼恐らくは病弱にして父母の煩たらむ。余は余の愛兒の、常に活潑々として無休息なるを感謝する者也。

而して其破壞や、更に他の意義あるを覺ゆ。第一は小兒より見たる利益なり。これには娛樂と見たる方と、研究と見る方とあるべし。今小兒に一本の策を與へたりとせむ。彼は嬉々と聲を放ちて、力一杯に之を揮り廻し、衝たるを幸ひ、薙ぎ拂ひ、打ち叩くべし。その物に觸れて音を發し、抵抗して響を聞く時、殊に或物を打ち壞したる時、彼はさながら喜悅に堪へざる面持を顯さむ。蓋し破壞は彼に取りて、無上の愉快なれば也。此觀察に於て、破壞は小兒の一娛樂とも謂ふべし。

次に彼に人形を與ふるとせむ。(笛にてもよし)。其泣く聲は何處より發するか、是れ彼の不思議におもふ所なり。乃ち之を兩手に握りたる儘、引張り、引縮め、指を突き込み、千切らむとし、搔がむとすべし。また彼に提灯を與ふるとせむ。光の輝くは是れ不思議なり。乃ち蛇腹を引搔き、蠟燭を掴み出し、之を碎き、更に提灯をも破りて棄つべし。而して是れ果して何の爲なる乎。こは小兒の事物に對する唯一の研究法にあらずや。いかに丁寧精細を極めたる所作なるかな。斯くして小兒は天賦の智能を自ら啓發し行く也。されば乞ふしばらく、小兒の破壞を行ふ前に方りて、いかに彼が其目と其手とを弛まず働かすかを熟視せよ。單純なる物を與へたる時は僅かに寸刻の餘裕、複雜なる物を與へたる時は稍久しく、之を眺め、之を保ち、何をか訝るやうなる樣子を示して、後倏ち例の破壞手段に及ぶ也。之を傍より觀て、眞に無意義なる擧措も、彼に在りては悉く益を爲さゞる無し。之を叨りに叱呵する如き、却々に心なきわざと知らずや。

德川氏の末、國禁漸く弛みて、蘭醫の解剖學を講ずるや、如何にしても實地の人體解剖を試みたく、夜竊かに小塚原の刑場に忍び行きて、死屍を搬び來たり、同人打ち寄りて内臟器を剖き、關節を解き、腦を撿め、恰も小兒が玩耍の内部を研むるが如きものありし也。人智の初步に於いて大人の爲すこと、大概小兒の爲す所と異なるを見ず。

破壞の第二の意義は、吾人より見たる利益なり。夫れ破壞は革命を意味す。こは吾人に取りて、いとよき教訓たらずんばあらず。破壞なくんば建設なし。革命なくんば自由は來たらず。余は小兒の破壞を感でざるを得ず。余は彼の傍に位置する各々のものが、其唯一個にても破壞の運命より免るゝことあるを以ツて、寧ろ奇怪となすもの也。聖語に『神は愛なり』といへるが、其表情法に倣ひていへば、『小兒は破壞なり』。余は自ら斯くの如き金言を作りて、小兒が、吾人より見て如何に貴き品を破壞したりとも、全然咎めじものと定め居れり。そは畢竟破壞は破壞を憂ふる者の不注意

に歸すべければなり。

凡そ破壞には、少なくとも破壞せらるゝ目的物の、位置、實質若しくは用法の不完全なる點あるを常とす。例へば小兒が爛缶を覆したりとせむ。先づ覆りさうなる位置を取りしものは誰ぞや。碎け易き實質を撰みしものは誰ぞや。而して其小兒が若し火傷を負ひたりとせむか、人間が未だ光と熱とを分ち用ゐる能はざりし科學的知識の缺乏に座せざるか。熟く考へ來たれば、只研究と光明とに憧れて、夢中に這ひ縋りし小兒に責むべき過失は一もあらざるべし。余は小兒の態度を無邪氣なり、殊勝なりとして、之を頌め稱ふるに恪なる能はざる也。

憶ふ、フランス革命は、歐洲に於ける前代文明の破壞にあらざる乎。我邦維新の改革は、舊組織の粉韲にあらざる乎。破壞よ、粉韲よ、汝は再び現代文明の上に、汝の大鐵槌 Miulnir を降すの必要あるを認めざる乎。あゝ革命よ。

其五　小兒と向上 ●●●●●

小兒ほど向上の性に富めるは無からむ。如是我聞、昔悉曇太子の迦毘羅衛王城に於いて、其母麻耶夫人の腹を蹴つて出づるや、直ちに右手天を指し、左手地を指して、『天上天下唯我獨尊』と宣りたまへりと傳ふ。斯くの如き態度は、唯一太子に限られたる乎。否々余が愛兒に於いても、余の屢々見掛くる所なり。惟ふに太子以來三千年生滅滅已せしすべての小兒は、今ながらふる幾億の小兒と共に、皆恐らくは然りしものあらむ。見よ、彼が一指を出して高を仰ぎ、『う！う！』と呼ぶところは、さながら天上靈なる者を認めて、我を擧げよ、我を彼處に伴へよと求むるものに似たらずや。あゝ愛すべきわが兒よ。ヲルヅヲルスの雲雀の詩に、Up with me! Up with me into the clouds! とあるは、詩人の心を歌へるよりも、寧ろわが兒の心を歌へるものとして頬笑まるゝを禁ずる能はざる也。

然も『我を擧げよ』といふは、未だ正しく小兒の心を穿ちたるものにては無きやも知るべからず。寧ろ『我自ら上らむとす』といふこそ、最もよく彼の心理を代

言したるものなれ。余が机に凭りて書を繙く時、余が愛兒は余の傍に這ひ來たり、やがて余が膝に登り、はては机の上にまで這ひ上り、書物も原稿紙も其處に在るもの、悉く掻き落して、獨り天下を占めたる顏に、昂然として他を見遣り、脚を投げ出したる儘兩手を擧げて、自ら喝采するが如し。其狀や頗る得々然たるものあり。親たる者、亦深く感せざるを得ざる也。

又余が食事の膳に向ふことあらむ歟。彼は机の上に上りし時と同一の態度を以つて攻め來たり、遂に膳の上にちんと鎭座しますに至らずんば已まざるべし。更に他の時をいはゞ、一室の床の間こそ、彼の最も愛好する所なれ。彼は日に幾回となく此處に這ひ登りて、常に莞爾として手を拍つて喜ぶ也。さはれ以上の三の場合に於けるよりも、更に〳〵彼の心を悦ばしむるものは、**梯子に攀ぢ登ることなり**。危險といふが如きは、彼の未だ自覺せざる所なれば、思ひ立つや、彼は直ちに身を脱して、**しやにむに**攀ぢ登らむとすべし。而して一段は一段より、彼の喜を増すを見る也。此運動に

現はれたる向上は、彼の滿腔の理想にして、此理想の遂行の爲には、彼は全身を投げ出して顧みざる也。然も若し之を危險なりとして制むるものあらば、彼の進歩はこゝに中斷せられ、彼の將來はこゝに終結せられむ。世にある意氣地なき兒、臆病なる兒、苗にして秀でざる兒は、幼時の向上運動を妨げられたる結果にあらざる乎。

向上は人生の目的なり。但近時一部の青年の間に持て囃さるゝ（恐らくは誤解せられたる）精力主義のやうに、投機的と射倖的とを問はず、徒らに空華なる物質上の成功を競ふ有樣にては、寧ろ處世の危機といふべし。斯かるいきはの向上は、余の固より呪ふ所たらずんばあらず。余の意味する向上は、今少しく精神的なり。今少しく道德的なり。而して今少しく形而上學的なり。隨つて成功といふも、之を必ずしも物に就いて見ず、唯其人に就いて見る。而して之を遠き將來に期するにもあらず、又明日に待つにもあらず。勗めて其日〳〵に成功して、其日だけづゝの向上を爲し行く也。換言

すれば其日の事業を出來得る限り忠實に爲すべく、自己の精神と身體とより迸り出づるすべての力を用ゐたる時、其事の成否に拘らずして、成功の意義は其人自身に於いて完結せられたりと見る也。而して向上は即ち此成功を土臺として、其上に同じものを積み重ね行く謂に外ならず。かくて人々は時々刻々にも向上し行く也。さて然らば向上の頂點は如何。或人（北氏の如き）は、人間は向上して排泄作用、生殖作用を廢し得る程度に到るべしといへど、余は更に人類が進み進んで止む時なくば、遂に此物質より成れる肉體を脱ぎ棄てて、一種の靈體生活を營むの時期あるを信せむと欲する者也。既に學問の進歩、機械の應用は、體力の不必要より次第に肉體其者の不必要をも認めむとする勢あるを示すにあらずや。余は千萬年の後、この空想の實現せらるべきを預言するに憚らざる也。

さはれ今小兒の體現する向上運動に就いて、吾人は人類が不知不識の間になりとも、縦に横に、絶えず最後の向上點に馳せつゝあるを快とする者也。殊に余は

小兒の梯子登りに就いて、人生向上の嚴格なる敎訓――寧ろ命令を聽くおもひを爲す者也。

其六　小兒と獨立

自主獨立は小兒の性なり。やがて人間の性なり。若し世に自主獨立を喜ばぬ人あらば、そは其人の固有性にあらずして、境遇因習より來たれるものならざるべからず。試みに目をとめて小兒の運動に鑑みよ。彼は何事にても己一人にて爲さむと欲するにあらずや。其事が彼の手に餘り、彼の力に及ばぬ企なりとも、又それが爲に曾て知らぬ困難と、未だ味はぬ苦痛とに接せむ虞ありとも、彼は一たび爲さむと決したる以上、遂に爲さでは已まざるべし。此場合に於いて彼の受くる多少の怪我、例へば不意の打撲、顛躓、墜落等の失敗ありとも、彼自身の爲したる所なれば、彼は極めて平靜なり。然れども若し他の補助、先導ありて、同樣の失敗に陷りたらむには、彼は必ず不平鳴動を起こすべし。斯くの如くなれば彼は常に獨自一個の工風にて玩要を弄び、之を破り、獨自一個の工風にて襖なり戸

獨なりを傳ひ歩き、或は尻餅搗きたる時、或は引繰り返りたる時、それ〴〵異なりたる塲合に、彼自身如何に處すべきやの工風を彼自身に定め居れり。他の之を手傳ひ、扶くるは、却つて彼の本旨にも違ひ、又彼の發達にも障むるべき也。

之に就いて、余は自我の發展といふことに想ひ到らざるを得ず。余は今、性の善惡を論せざれども、自我の圓滿なる發展は、小兒に於いて最も注意すべき事柄にして、又其注意の結果の最も現はれ易き時代なるを信ずる也。自我は人間の中心なり。個人の靈臺なり。Man within man なり。之なくんば自己も昏し、社會も暗し、自己と社會との關係も見えざるべし。本心の覺醒なければ、天職も不明に了はるべし。自我は人間中心の光なり。自我を擁蔽するは、燈を點して枡の下に置くものに類せずや。余は自我の倫理上價値をも詳論せざるべし。されど自我の圓滿なる發達に伴ふ當然の傾向は、自主獨立ならざるべからざるを信ずる也。世の保育者の態度を見るに、多く此點に用意なきが如し。偏に小兒の自主獨立は危險なりとして之を防止す。例へば小兒が辛うじて歩み得る時、手を取り扶けて、不自然なる笑を發せしむ。小兒が落としたる物を拾はむとする時、倒したる物を立てむとする時、小兒自身をして之を拾はしめ、之を立てしめず、大抵は保育者扶けて之を爲さしむ。これ大なる心得違ひにあらざるか。斯くして生ひ立ちし小兒が、後來に至りて、依賴心多き、懷手して爲す無き、進取の精神に缺けたる大人とならずんば、實に思ひ設けぬ幸なるのみ。

余は世のすべての保育者に忠告す。小兒をして彼自身のことは彼自身をして爲さしめよ。一切他の補助を與ふる毋れ。若し彼の爲し能はざる時は、彼の爲し能ふ日まで待つべきのみ。而して余は現に斯くの通り、余の愛兒に實行しつゝあり。危險の如きも人間の不注意より來たるそれ（例へば剃刀を放り出し置きて怪我を爲さしむるが如き）の外は、成る可く顧慮せざるほどに、彼の欲する處に在らしめて、其爲す儘に放任し置けり。希くは自我の強き、意思の剛き、膺揚なる小兒を得むかな。記せよ、「最強の人とは、獨立する者の謂なり。」（イプセン）。

菜食論（三）

加藤時次郎

▲菜食主義の歴史（續）

近代に至つて、菜食主義に就て最も優れた精神的勢力家が顯れたが、其の主義實行の方法に至つては、ブラーマー Brahma 及びザラッースラ Zarathusra 等を基礎として、嘗てピタゴラス、ソクラテス、オビッド、ゼチカ、アルロニュース（チラノーの人）、プルタルヒ、ポルフィリュース諸氏の示したことを繰り返しだに過ぎないので、前人の成蹟以外に確乎たる方法を用ゐたことを認めぬのである。

レオ・トルストイ伯は倫理的原理より此の主義を實行して居る。伯は現代に於ける一大偉人として尊敬せられつゝあるが、十九世紀中に於ては、宗教家、哲學家、詩人、政治家及び社會改良家等の多方面より稀に半信半疑を以て評論せられ批評せられたのである。併し伯の主義を信仰する同志の漸次其の數を加へ來れる今日に於ては、彼等も伯に對する評論批評の口を噤むに至つたので、此の根本的思想家たる伯に對するの感は、恰もザラッースラ、ピタゴラス兩氏に對するが如くになつた。かくて、あらゆる宗教の開祖に於ける宗教思想の回復は、此の道德宗教家たる伯によつて赫灼たる光明を得たのである。世間には普く知られて居らぬが、千八百九十二年に伯の著した「第一歩」といふ書中に、左の言がある。

予は今善良なる生活に就て確定せる規律を要することを説明せんと欲するのである。人若し嚴肅に善良なる生活を送らんとせば、一定の規律を確守せねばならぬ。而してその守るべき秩序の一節として、予は玆に德行、節義、獨立、自治の四つを擧げるので、規律の第一着としては、先づ食物の節用、謹愼を守るの必要がある。人間が人として此の秩序の嚴肅に努め、善良なる生活を送らうとするには、總ての動物性食物を節せねばならぬ。如何となれば、是等の食物を取る時に、吾人の衷心に興奮し來る同情の念

は、直ちに其の肉食を以て甚しき不道德なりと感じ得るのである。殊に吾人が彼等動物に對して『虐待』てふ道德感覺を起すは彼等を撲殺する場合にあるを以て、之に就ての希望は食物の慾望と口外の搔癢とに驅らるゝことなく、よく之を節したきことである。肉食禁忌は禁戒の第一の行爲で、啻に道德生活と認められて、一箇の人間の爲すべき所たるに止らず、一般人道上、完全にして而も自覺ある人間生活の立派なる一發現として、著しく賞揚せらるのである。人道の如何なるものなるかは夙に知られて居たのに、何故に今日迄人類が此の方規による學識に到達しなかつたであらうか。斯かる質問は其の餘りに陳套なるが故に、殆んど自己を固有の正道に反らしむるの力はないが、併し普通の考に比すれば、尚ほ多少正道に向はしむるものである。吾人が此の質問に對して爲す所の答は、やがて是れ各自進歩の根抵を爲し、常に徐ろに發現する所の人道的運動、即ち決して偶然でない、持續的の、絕えざる速力を有する所の、眞正なる運動となるのである。

と。吾人日常の生活にあつては、肉食より菜食營養に移る場合、其の肉に遠ざかれば遠ざかる程、多く肉に對する知覺を失ひ、而して常に大なる擴張を得來る所の菜食主義の著しき運動が、全力を以て進めば進む程、菜食に對する知覺を大ならしむるのである。故に十年以來、毎年菜食主義の書册及び新聞雜誌等續々世に公にせられて此の主義を鼓吹し、菜食といふ叫び聲の甚だ高くなつた今日では、既に早や多くの人の肉食を廢したる者を見るに至つた。殊に外國中でも獨、英、米國等にては、菜食をのみ給するホテル、料理店等漸次に增加する勢ひである。此の形勢は地球上に神の御國の實在を認むる人々には喜ばれねばならぬことで、只此の道德上の意味よりのみする菜食主義は必要なる進歩で（總ての進歩には、必要なるもあり、不必要なるもある）人類の道德完成上、嚴肅方正なるつとめである。菜食主義弘通の運動は、先づ圓滿普遍なる順序として、此の第一階段、即ち道德上の意味を以て始まら

ねばならぬ。

以上、前提として菜食主義の發達史を、單純なる觀察點より述べたが、なほ現代に於ける菜食主義の歴史を説明したなら、吾人の實驗は少くとも古代に於けるよりも遙に大なる注意と擴張とを見出すべきことを知り得るであらうから、以下進んで之を講究しやう。

菜食主義の新時代的發達の世紀を回顧すれば、今日に至るまでの間に、此處彼處に此の主義の紀元となるべき運動に適したる、寺院菜食の信仰を高めやうと試みたのであつた。さりながら近代に至つては、此の宗敎的紀元に反對して、唯哲學的倫理を以て菜食主義の原理の境界線となすもの多きを見るのである。此の倫理を以て限界線を劃せんとする者は、何れも各々彼等自身の立場よりせる社會的及び道德的觀察をもつ人々であつて、それが爲めには彼等は往々自然を離れて思考し、常道を逸して觀察し、或は自己の生活の荒蕪より動かされて故らに世人を苦痛矛盾の淵に陷いれるのである。

現實界に於て生活するよりも、思想界に於て多く生活する所の男子等は、甚だ多く近代の菜食主義に於ける色々の歴史を作つてゐる。彼のディヲゲネス氏の如き、屢々精神的に高尚に働ける珍しき人であつた。其の中庸を脱し、自然を離れ、あらゆる現存物を放擲して例外に傾き、その高き感情には、泡立たしめて、眞個人生の苦痛より速に解脱ののがれ道を得んとする熱思烈想の頭腦は、菜食主義の敎に就ての極めてよき戰鬪者であつた。

此かる戰鬪者中、戰線の第一線に數へらるべきものが二人ある。此の二人は、誘導者として最も誇るに足る人物で、殊に多く近代に於ける菜食主義の發達を助けた。其の一人をロルド、ビロン Lord Byron（一七八八年――一八二四年）といひ、他の一人を詩人ロルド、シュレー Lord Shelley（一七九二年――一八二二年）といふ。シュレー氏が精神的言辭はその幼年時代にありては價値を有しなかつたが、全く文明の世界となりて詩人たるの名聲を博したる而立の頃、氏はアルビオン

（英國古代有名なる山）に於て神の如く尊敬せられ、十九世紀に至つて其の言辭は世に重んぜられた。ビロン氏は世界の苦痛及び注意を惹起したる詩人ではなかつたが、虚僞の希望及び冥想的疑心に打擊を加へたことはなからうか。又、彼の驚くべき詩句は彼自身の實驗的自然を再び報告したのではなからうか。彼はその生涯中、自己の精靈を自由放埒に赴かしめず、內心は常に破るゝばかりの驚愕をなしつゝも、他のものには鋭き精神感動を與へてゐた。彼は又單純に明瞭なる世界觀をすら作り遂げ得なかつた。けれども其の學識、温き感情、及び舌頭、同情的知覺、平等的感能等は、總ての善と德とに於ける神聖に輝いた。そして其の十善なる高德の性質は、彼の浮沈定めなき思想の不明瞭及び世界と人類との不眞實なる觀察を埋沒して了ふに十分であつた。此不撓不屈なる二詩人が菜食主義の多くの同志を得たことは、驚歎に絶えた所である。詩人の感化力は常に傳染性の働きを爲すを以て、恰も此の時は、既に準備したる土地に偉人の天降りたる如くであつて、其の行動はさのみ驚くべきほどの事でもなかつた。

近代の初め即ち一八〇一年の劈頭に於て、倫敦に菜食會組織せられ、暫時にしてマンチェスターのダブリン及び其の他に此の種の會合が踵を接して續々起り來つた。英國は菜食の模範國とも謂ふべく、肉食滋養の過剰に對する自然調和の反應として指示すべき國である。（大英國民より肉食の多大なる國はなかつた）人間の特有性として、一方に盛なるものあるときは、之を陷れんとする惡戯者を生ずるが常で、此の時に於ても、英國では肉食者の數を殖やし、埃及の古代の如く肉食用器を潛に蓄ふる者をすら生じた。然るにそれが又一の反抗的動機となつて、反つて又菜食主義を試みんとするものをも增さしめたのである。

秋蒔種子の無代配布

岡山縣邑久郡行幸村長船農事試驗場にては荷造費として切手拾錢を送れば例年の通り有益の種苗、舶來蔬菜及西洋新草花貳拾種を何人にも無代配布する旨同場より通知ありたり

予が實行せる菜食主義

新英州プロビデンス七月二十二日

金子喜一

△今より二個月前、予等夫婦は新英州のうちで最も風光の美に富むでゐると曰ふナラガンセット・ベエイに住むことゝなつて、プロビデンス市を離るゝこと約三哩ばかりの海邊に居を定めた。そして毎日海邊に散歩しては、昔時の少年時代に立ちかへり、靴ぬぎすて、ヅボンまくりあげ、淺瀬にクラムをすなどり來りて、夕食のテーブルに供ふるが習慣となつた。

△一日、例の如く予は妻と共に食堂で例のクラムスープを味ひつゝあつた時、予等の新同居人たる一女敎師がはいつてきて談偶まクラムスープの料理法より肉食の殘酷にして而も無益なることに說き及んだ。予は丁度シンクレヤーの名著『ジャングル』を讀むで、如何に製肉所の不潔にして、所謂鑵詰食品の殆ど喰ふに耐へざる有様を知つてから、成るべく肉類を市に買ふをさ

けてゐたので、予も大に菜食主義と曰ふことを考へつゝあつたのだ。

△で、予等三人は凡そ一時間ばかりも所謂菜食主義を論じた後で、予は一個の相談を申し出した、『諸君がそれほどまでに肉食を否定し、製肉屋の不潔を知悉し、所謂人情主義をふりまわすなら、何ぞ自ら起ちて先づその實行者たらざる。予は不敏と雖も諸君の例に從ふに敢て躊躇するものでない。諸君の意如何』と、

△所がこの辯舌に富める女敎師先生の曰はるゝには『妾は肉食の不可を理論上認むる者で、必ずしもその實行者たることは出來ない。白狀すれば妾は肉なしに一日を過し得ませぬ』と。予はこの口舌的社會改良家の無益の長舌に耳を傾くるより、先づ自ら實行してその可、不可を見んと思ふて、妻と相談した上で、その翌日から直に菜食主義の實行者となつて了つた。

△勿論、肉食の習慣をすてゝ直に菜食と曰ふは何人にとりても隨分困難である。料理屋にいりて他人がウマさうなビーフを喰ふてゐるのを見たり、肉屋の前を通

つてフレッシの肉片を目にするとムラムラと肉食の習慣性が起きてくる。で、予等は最初魚肉を少しづゝ用ひて、殆ど二週間の後には全く肉類を用ひぬことが出來る樣になつた。

△菜食と曰ふてもタマゴは無論喰ふ。牛乳は飲む。バターも用ゆるのである。予等の日日の重な食品は米、卵、牛乳、煮た梅、麵麭、干葡萄、葱、人參、大根、蕪菁、レトス、豆、各種の苺類等で、わけても葱は最も有益な食物で、神經質の、瘠せた人には適合せる食品である。

△一日二度宛ゆでた葱を喰ふと、血液の循環や一切の身體の活動を全く一變して了ふ。吾等は如何なる野菜を料理するにも必ずこの葱をのがしたことがない。眞に葱ほど有益な野菜はまたとないであらう。木實の如きも少きは實のうちに多量の精分を含んでゐるので、菜食家には恰好の食品である。世人はナッツの如きは一種の副食物としてのみ考へてゐるが、これは大なる誤りで、寧ろ正食物として喰ふべきであると思ふ。

△一切の菓物は何れも菜食家の喰はねばならぬ食品で折にふれての新しい菓物ほどメデたい者はあるまい。わけてもオレンヂ、リンゴ、ブドウは菓物中の三大菓物で最も滋養分に富んでゐる。米國にてはリンゴは殆ど一年中絶ゆることなく市場にあるので菜食家にとりては最も便利な菓物であるのだ。

△牛乳は菜食家にとりては是非欠くべからざるものである。予は現に一日三合宛一人で用ひてゐる。米國現代の女詩人として知られたるエラ・ウイルコックスは吾人と等しく菜食論者であるが、近日紐育ジョーナル紙上に記して曰く『昨日予は一人の立派なる體格を有てる男と語つた、丈は六尺を越え、重みは二百パウンドをはかり、活氣と精力と健康にてみてる體格は何人をも羨望せしむるほどである。此男の曰ふ所を聞くに彼は六年間牛乳のみにて生活したとのことである、……初めの程は少しく不都合を覺えしも、漸く習慣となりて、終には平生虚弱なりし身も強壯となり、一日十二時間の勞働に容易に耐へ得るほどになつた。』

△予は牛乳の効力に付いては深く實驗し、またその有益なることを信じてゐる。米國に於て良家の子女はその六歳位に到るまでは、殆ど牛乳とパンのみの食料であるが、却つて肉食をほしいまゝにせる成人よりは、發育の點に於ても、健康の度に於ても勝つてゐるやうである。

△ある肉食論者は卵や牛乳はインバリッド●フードであつて健康者の食物ではないと曰ふて、頻りに卵と牛乳をけなす者があるがこれは少しく極端に走つた論である。病者に適する者だとて必ずしも健康者に適せぬ理由はあるまいと思ふ。否な病者に適するほどの者は健康者にはなほよいのであると思ふ。

△予は菜食主義に變じてから同時に、一日三食主義をやめて一日二食主義となつた。此二食主義は勿論予が紐育にゐた頃からはじめてゐたので、時に依りては規則を破ることもあつたが、此頃になつては全く二食主義になつて了つた。元來吾等人間が一日三回も食物のため時間を費し、勞力を費し、金錢を費すのは頗ろ

間違うた話である。

△今日の所謂贅澤は實に食物の贅澤である。米國の所謂ミイリヲチャーは食物調達のため、僅に二人か三人の家族に四五人若くは六七人の人を雇ふて、やれバトラーであるの、クックであるの、キッチンメエイドであるの、アッシスタントバトラー、クックであるのと曰ふ始末で、ジョーヂメレヂスの歌ふた如く『文明社會の今日では、美術、文學、音樂、宗敎なくも可ならむ、而も彼等は料理人なしには一日も生活し得るものでない』と曰ひたいのである。

△二食主義の効力は單に時間と金錢との經濟を意味するのみでなく、同時に健康を意味してゐる。予は肉食を盛にし三食癖をやつてゐた頃は、絶えず胃の病を受けて、頭痛、惰性、不眠病等に冒されたものであるが、二食主義を實行して以來は、食物の消化工合極めてよく、未だ嘗て前述の病を感じたことがない。

△六月二十一日の「インデペンデント」雜誌にチャールス●シエルドンは『一菜食家の自白』と題して一文を寄

せてゐるが、そのうちに矢張簡易食事主義を論じてゐる。大要を曰ふてみればかうである、『今日の文明人種は啻に多食するのみでなく、食物調達のため多大の時間を費してゐる。予は予の妻が食物調達のため彼女の半生を無益に費し、また所謂下女をして多くの皿を洗はしむるの誠に無意義なるとを信ずる者である。菜食生活は吾人の生活を簡易にする。十分の時間があれば朝食の用意はなし得らるゝのである。菜食家は多くの肉をあぶるの必要もなければ、多くの種類の皿を作るの要もないのである』と。

△菜食家のテーブルには二三種の皿があれば足りるのである。時としては一種より以上ないこともある。用ひた皿も肉食の如く油づかず、洗ふに最も容易である。予は菜食家の食事の如何に清潔で、簡單で、そうして如何に經濟であるかを感せざるを得ぬ。

△クリスチヤン、サイエンス宗の開祖、ミセス、エデイー女史は今年八十五歳の老人であるが、その健康愈々まさり、恰も四五十歳の人の如く行動し得るのである。其秘密はと曰へば矢張り二食主義の結果で、余り多くを喰はず、新鮮の空氣を多く呼吸する習慣の持ち來した賜物である。名優サラ、バーナードも近日その健康の秘訣を語つて曰ふた『健康を得るの最要件は肉食でもなく、多食でもない、只だ新しい空氣を毎日多量に吸ふこと、能く眠ることの二件である』と。

△予は信じてゐる。若し世人が吾人と等しく菜食を實行し、二食主義をとるに至つたなら、世間ありとあらゆる病氣の大部分は取去られ、人は健康を樂しみ、眞の清い生活を喜ぶの情は、今よりも一層增して來るであらうと。予は今に於て偶然の出來事より肉食を廢して菜食家となつたことを心から喜んでゐる。最後にくりかへして曰て置く、生活のまことの樂しみ、健康の秘訣は菜食主義と二食主義と新鮮の空氣と充分の睡眠より來るものであると。

記者曰ふ、次號には金子夫人ジヨセフインコンガー氏の婦人問題に關する論文を掲載すべし。



彼女は牢獄に在り

山口孤剣

青き法衣の聖僧が
ゐならぶ如き獄窓の
若杉の木蔭を編笠の
涙に濕じむ細眉は
見えねど歩みたゆたひて
梟のまへの鶯の
いじらしげなる女囚あり

たふとき愛も一塊の
冷きパンと交換るこそ
女の耻づるわざとして
心臟は乾干らび海綿の
涙の潮にうるほはず

髓を穿てば貝殼も
眞珠の靈光耀くを
罪惡の暴風に青黑き
運命の岩にまかれては
「羞辱」と「悲歎」の荒磯邊に
足に蹂まれて老ゆるのみ

男子といひそ海魔の
するどき眼光らして
春をひさげる醜つ女と
火を吹くごとき熔鐵を
星しづかなる山百合の
ま白き額に彫みつゝ
聖き情の花園を
汚す汝が涙とて
野獸のごとく罵れる

闇黑に生れて闇黑を友
闇黑に逝くべき虫にして
天つ光を知らずとも
罪惡の繩をし編むべきか

貧苦を避くる籬には
魔草毒草いや茂り
かよわき蝶を害ふは
これ社會の正義かや

美なる社會の組織よ
宗教の花は淨くとも
藝術の酒は甘くとも
冷きパンに長き夜を
獄の窓に泣きあかす
木枕の涙拭はずよ

夜の翼は黑うして
彼女の舟をつゝみたり
奔馬の如き怒濤は
くだけよ、破れよ、沈めよと
磁石たをれぬ、梶折れぬ
聲をかぎりに叫べども
地平線上星もなく
飢餓の岩礁の險しくて
雲の上には微笑める

天の使はありながら
空をし翔る海鳥は
たのしき歌を奏せども

鞭の苦しみえ知らずば
などか覺へむ駒鳥の
背の羽の紅き血を
姿醜き簑虫の
露に悲歎をもらすとき
憎惡の炎もやすべき
鬼のやうなる看守等も

我れは喚ばれん罪人と
同じ運命の身にしあれ
さびしく暗き社會の冬に
胸の牧場の草枯れし
希望むなしき女性見て
こゝろ紅蓮の燃ゆる火に
光さめたる白臘の
冷き我が頬に落ちたぎつ
涙よひとり熱かりき

富士山に登る記

堀　保子

（一）出發

ことしは、ことしはと、思ふばかりで出來なかつた富士登山を、今年こそは愈よ、しやうではありませんかと、語り合つたのはツイ先月の初、よい連の出來たのを幸と、月の六日、新橋から東海道鐵道で箱根を越しました。

國府津驛で御一緒にとお約束をしておいた加藤の奥様方御一行は、つひ打合の行違ひから、一汽車おくれて御殿場口からお登りになることになり、それでは頂上でお目に懸りませうと、國府津停車場の汽車の中と外との立話、そのまゝお別れして了つたのは此上もない殘念でございました。

箱根にはモウ秋草が咲いてるではございませんか。黄色な女郎花の風にたわゝな彼の姿、赤い心のどこまで優しいやら撫子の、今さびしい〳〵想ひに耽つてゐ

る私を、慰め慰めしてくれるのかと思ひますと、私どうしても泣かずには居られませんでした。古道むなしく荒れはてゝ、見かへる旅人もない山の中の、かうした淋しい自然にも、尚ほ花も咲けば風も薫る、悲しがつてゐる人の爲めに、新らしい生命の息を吹き込んで下さる慈悲も籠つてゐるのですわねえ。

鈴川停車場に着いたのは正午、此處で深尾さんの御兄妹二人と落ち合ひ、都合四人、歩くよりも遲さうな小さな鐵道馬車にゆられて大宮町に向ふ。大宮からは元の登山道の外、本年新たに便利な道が開鑿されて、三里ばかりも近くなつたといふ話も聞きましたし、それに表口といふ名の、どうしても此處から登らねばホントで無いやうな氣が致しましたので、都人の皆御殿場口よりするのを私共は態々こちらに迂廻して、さて如何ばかり此の新道の價値があるかを見やうと試みたのでございました。此夜は土地の案内を知らぬため人の言ふに任せて、淺間神社の前なる橋本亭といふのに泊りました。富士表山休泊會社といふのがあつて、登

山者らしきものに一々登山の費用などを書いた案內書を呉れました。

晩御飯の時の女中の言草が面白いので、宿の待遇のあんまり放任な不平なども何時か忘れて了ひました。御飯が大へん強くて少しシンがあるやうなんでございませう。すると女中が此う申すんです『こちらでの名物は水に芹に嬶天下なんで、つひ水が善すぎるものですから御飯が旨く出來ません』と、成るほど、水が善すぎると御飯が旨く出來ませんかねえ。私どもは女中が餘り眞面目に話しますので、笑ふことも出來ず、をかしさを忍んでゐました。晩御飯が濟んでからブラ〳〵と淺間樣にお詣して、其境內の有名な冷泉（富士の雪が溶けて此處に湧き出るといふ）に口や手をすすぎ、明日からの食料や帽子などを買ひ調のへて、折からハラ〳〵と降つて來た雨に明日の空を氣支ひながら宿に歸り、支度萬端を賴んでおいて、九時頃寢に就きました。けれどもそれから登山しやうとする人たちや、下りて來た人たちが、傍の室で晩くまでもガヤ〳〵騷いで居るので、どうしても寢就かれず、十二時も過ぎて、やう〳〵靜かになつたかと思ふと、今度は軒を流れてゐる淸洌なる川音に、雨かとばかり屢々夢を破られて、現の間に早や東は白くなる。今日はお山は上天氣といふ強力の聲に驚かされて、匆々に身支度を整へ、例の『水の善すぎる御飯』を喉につまらせて、少し濟まぬ氣持はしながらも、私たち二人の女は馬に、深尾さんと弟さんとは徒で、老功の強力一人を賴み、丁度太陽の雲を破る頃ほひ、打連れて宿を立ちました。出ると直ぐ爪先上り、否實は昨日の鐵道馬車からして既に裾野を爪先上りに上つて來たのでした。馬に乘るのは私も深尾の妹さんも生れて初めて、特に荷鞍をと賴んでは置いたものゝ、馬の一歩每に抛り出されはしまいかと安き心もありませんでしたが、十町も行く中にはモウ慣れて、道にかぶさり掛つてゐる木の枝を、潜つたり避けたり、果ては草花を折つて貰つて片手に持つたりなどして、氣樂に――マア氣樂にでした――進んで行きました。『英姿颯爽たるものだなア』とは此時の深

尾さんの悪口。怪しげな草鞋脚半に、大きな經木の帽子を顋に結へ付けて冠つた姿、それが落付かぬ馬の脊にカジり付いて居るものを、英姿颯爽なんて何といふ人の悪さでせう。

富士は雲の彼方に顔を見せたり隠れたり。

萩、女郎花、男郎花、釣鐘草、さては名も知らぬ秋草の、時は今と競ひて群がりて此裾野を飾る。

（二）馬がへし

歩一歩、進めば進むほど前は高くなつてまゐり、裾野はいつしかと過ぎ去つて、自分の居る處は早や海拔何百尺かの高さと見え、ふりかへつて見れば今歩いて來た小徑は帯の如く糸の如く彼方にうねりうねつて居ます。青疊の様な田の面の眺は、先どんなに私共の心を慰ましたらう。

まだ疲れはしませんでしたが、強力のすゝめるまゝにカケスバタといふ所の第一の茶屋に暫時休息いたしました。おいしからぬお茶、腐つた卵、さアこれからがホントの山、由來弱い私たちに、登れるか登れぬか、行けるだけ行つて見ませうと、再び馬に跨つて出掛けたのは彼是八時頃でゝもありましたらうか。登り行く人々、絡繹として、數町の間は、白衣の人、洋服の人、歩く人、騎る人、追ひ越す人、おくれる人、皆一條の細い小徑を、蟻の觀音詣のやうに行列する面白さ。「今年は新道が開けたので、例にない此の賑はひ」とは、



强力と馬子の間はず語り。しばらくにして着いたのは早や一合目。

一合目！一合目！私たちは此う叫びました。豫て期したる事とは言ひながら。「一合目」といふ文字を眼のあたり見た時の私たちの胸はマア如何に躍りましたでせう。ホントに私たちは今、東海の天に聳えて、一萬二千餘尺と算する富士の名山を登つてゐるのです。足の踏む所は是れ此の大火山の砂、吸ふ所の空氣は是れ此の大高山の息、あるに甲斐なき女私たちも、雄心の胸にこみ上るを覺えまして。

これから上は暫らく休まれぬといふので、强力の命のまゝ――もう此うなつたら强力の言ふ通りにするより外ありません――未だ少し早すぎましたけれど、晝御飯を認めて居りますと、成るほど來ます〳〵、富士にと志す人が猫も杓子も、あとから〳〵と登つてまゐります。昨夜大宮町の宿で宿帳をつけるとて、つひ前の方をひつくり返して見ましたところ、それは〳〵面白い。職業の所に名々色々な事を書きつけてある中に、

學生もあれば官吏もあるのはよしとして、どう間違へたのやら「待合」と書いてあるのもあれば「宿屋」「飲食店」など〻書いてあるのもある。これでは宛で待合だの宿屋だの飲食店なんぞが歩き出して富士へ登つて來たことになるではございませんか。それよりもモット可笑しかつたのは同じ職業の欄に「呉服」「砂糖」「牛馬」などゝ眞面目くさつて書いてあつたのでした。世が進歩すると呉服や砂糖や牛馬などまで登山が出來ると見えると、四人して腹を抱へたことでしたが、それにしても「牛馬」なんて云ふ職業はどんな職業なのでせうか。まさか今日私たちを乘せて來た馬さん達や其のお友達の牛どのが大宮に贅澤な宿を取つた譯でもありますまいにと、こんなに引きも切らず登つて來る人々を見てお茶を飲みながら高笑をしてゐますと、そこに又登つてお出でになつたのは十三四の孃さん一人をつれた四十あまりのお父さん、六十以上のお爺さんと連立つたデブ〳〵肥つた四十ばかりの男の方、いづれも東京の方だとやら。

さて此處を立出でゝ進めば、路は漸く森林帶にかゝり、先づ樅、栂、楓などを見る。生ひ重なつてゐる木々の、日の光りを通さぬためか、岩は苔次第に滑かに、道は追々と濘つてまゐり、蹄は一歩毎に深く落ちて、馬も人も今は大汗になつて來たのです。喘ぎ〳〵全身の力を籠めて、抜足さし足、といふのもヘンですけれど、高くなり低くなり、精を切つて煽り進む馬の脊に、振り落されじと氣を配る私たちの苦心は、並大抵の事ではございませんでした。かくて、八幡堂横丁といふを過ぎて二合目に着く。

二合目は茗荷嶽といふ處だとの事でした。此處の室は丁度普請の最中。こゝでも暫らく休んで、深尾の妹さんは植物や鑛物などを採收して、珍らしくも滾々たる清き泉に、これまでの汗を拭ひ、今一息と二合五勺の馬返しまで、金剛杖と共に又馬に乗りました。着いたのは十二時少し前、名殘をしくも馬に別れて、これからは金剛杖を力に、長き前途を進まねばならないのです。見上げれば霧は深く行手を鎖して、幾重とも知

らぬ此の神の寶庫に踏み入らんずる私たちの大膽さを拒むやう。あゝ此うなつては、都に育つた身の、實にも、實にも腑甲斐なさ！。

（三）石　室

午後〇時半、馬がへしを出立つ。弱き足の決して急いてはなりませんと、強力の言ふまゝに、二丁登つては休み、三丁行つては憩ひ、漸く三合目に達しました。今まで有つた樺、落葉松、シダの類も、此處からは早や全く影を收めて、アザミ、イタドリのところ〳〵に生えてゐる外には、風に吹きふせられた落葉松の、これこそ這々の體ともいふべきか、地面に接して低く枝を擴げた有様、強き風、深き雪の景色もさながらに想像せられるのでございました。

此時、霧はいよ〳〵深くなつて來て、五間も先は判然とは見えぬやうになり、偶には人をも巖をも飛ばすといふ恐ろしい風も、そろ〳〵吹き出してまゐりましたので、私はモウ何だか薄氣味がわるくなつて來ました。『サア、モ少しの御辛棒！四合目の石室は直ぐ此の

先』と強力は私たちを勵ましてくれるのでした。

三合から四合までの道ほど心細いことはございませんでした。風は耳を掠めて刻一刻に酷くなる、足元は燒砂ばかりになつて歩くのがチツとも捗らない、それにドウしたことやら四合目の室に近くなつたところで、一番强かるべき筈の深尾さんが眞靑になつて歩けなくなるといふ始末、私たちはモウ吹き飛ばされて了ひさうになつたので、金剛杖を深く突き立て、足を踏み〆め、雨よけに着てゐた茣蓙にシカと身をくるんで、殆んど轉がるやうにして、辛くも四合目の室に着いたのでした。

初めての石室、屋根も周圍もスツカリ石を積み重ねて其中に小舍を作つた此の石室、見る目珍しくも亦氣味の惡るい。中には男が二三人、お茶を汲んだり御飯を出したりしてゐるのですが、其の薄汚なさ、其の不精さ。水は二合目から運んで來るとか云へば、無理もないことながら、とても此處では食事や寢起の出來さうに思はれません。マア仕方がございませんので私たちは此處で暫らく休みまして、用意して來た食品なぞを出して食べました。をかしかつたのは深尾さん、ビスケツトやら果實やらを空腹につめ込んで、一寸の間トロ〳〵と假睡んだかと思ふと、俄かに非常な元氣が出て『さア前進！前進！』と大さわぎ。さつきの弱り方が餘り變だと思つて居たら、やつぱりお腹が空いて件の有樣『なぜお腹が空いたら召上らなくつて？』とお尋ねすれば『知らなかつたもんだから』といふ驚いた答。『それでも御自分のお腹の空いた位は判りさうなもの』といへば、『ボクは空腹を感ずることが出來ないのだ、理窟上推定することは出來るけれども』といふ珍妙の辨解。私たちは『ヘエー、そんなことがありますかねえ』と只呆れ。

室を掠めて横さまに飛ぶ雨と風と、少しは音が減つて來たので、此の間にと四合目を走り出たのは、時はモウ夕方の四時。五合目の石室はすぐ上の方に見えてゐます。今宵は其の五合泊り。

覺悟はして居たもの丶、石室の御飯の不味さ。大宮

の女中に言はせたら水が善すぎてといふかは知りませんが、こゝのは空氣が少なくて、思ふやうに煮え立たず、出來損ねの御飯を更に煮返して、お菜は燒麩に昆布のおつゆ。漬物は梅干ばかり。そして器の小氣味わるさ。どうして喉に通りませう。やつと一膳ばかり無理に詰めこんで、晝の疲れを休めやうと蒲團の上に横になつたことはなりましたが、床は土間に丸太をころがして板を張つた上に蒲莫蓙一枚、薄つぺらな蒲團を敷いて、室中は一杯のお客、足を延ばせば石にぶつかり、頭を出せば隣にさはるといふ騷ぎ。それに蚤の多いことゝ云つて、一晩中その包圍攻擊で碌々目も合はされず了ひ。

寢ぐるしさに、もう夜も明けさうなものと時計を見れば、情なや未だ宵の十一時半。室內はお客の息とランプの油煙とで炭酸瓦斯が一杯。少し深い呼吸をして生返りませうと戸外に出たら、まあ奇麗！月が出てゐるんでございます。皓々と大空に輝いてる月の其の立派さ、其のやさしさ！けれども下界では多分これを見

ることが出來ないのでございませう。綿のやうな雲が、それは〱何とも形容の出來ないやうにムク〱と大地に一杯——下界では空に一杯と申して居るんでせう——海のやうな、まるで綿畠の中に一面に綿を抛り出してあるやうな景色。一步二步踏んごんで見たいやうな氣持が致すのでございました。箱根の山々は蘆湖あたりから下は全く此の雲の腰卷に包まれて、相模洋の彼方、房總半島の頭が小くポツリ〱と見えるばかり。

夜明を待つて室を出ました。大そう寒くなつたので袷を襲ねたり、襦袢を着たりして。ところが、もう空氣の稀薄から呼吸の苦しさがヒシ〱と身にこたへるではございませんか。步かずに居てさへ何となく喉をくすぐられるやうな、えがらつぽい感じが致しますのに、步くが最後、一步進んでは喘ぎ、二步登つては又喘ぐ外はございませんでした。しかし廣大なる景色は一步每に廣く廣く展開せられて、ふりかへつては見る心地のすがすがしさ。愛鷹火山以西は雲はれて、富士川、安倍川、大井川、三保、御前崎、大宮町、靜岡市など手に取るやう。「こんな好い天氣のお山に會ふとは

何といふ御運のお客様方でせう」と強力の云ふほどの上天氣に、折から輝き出でた朝日は、私たちの登つて居る富士自身の影を其まゝ大きく東海の野に倒して、クッキリと印せられた紫色の其の迹は宛然三宅克己氏の畫を見るやうでした。

山あたりといふものがあるからとて、強力の「上の方を見てはいけません」と云ふのに、つひもう頂上はあすこ、室はどこと、上の方ばかり見たくて〳〵、強力の言ふことを聞かなかつた罰は覿面、どうしたものか急に心持がわるくなり、汚ないお話ですがとう〳〵二三度吐いて了ひました。「なアにいくらも此ういふ方がありますよ。殊に御婦人方なんぞには珍らしくはありません」と強力は平氣な顔、同伴の皆さんにお世話を掛けて、漸う登つた八合目までの途中の苦しさ。こんな時はホントに寶丹や葡萄酒が唯一の力です。

八合目の室で大分暫らく休みました。持つた來た食物の中で唯一色旨しいと思つた果實で、わづかに元氣をつけて又出掛ける。さアこれからは八合目の下の險路と共に、世に『胸突八町』と唱へらるゝ峻しい道。頂上に掛けての記事は深尾の妹さんにお譲りして、私はこれで御免を蒙ると致しませう。

富士山巓

（二）萬年雪

深尾けん子

それから私どもは、八合目で、携へてきたパンをたべて、お腹の方の用意はできました。さあいよ〳〵これからですよと、身仕度とゝのへてかひ〴〵しく、一人の強力を後につれて、室をでかけました。勢よく、出は出ましたが、上へのぼるに從つて、空氣はだん〳〵稀薄になつて居ります。一丁ものぼらぬのに、もう、いきがきれてこらへられませんので、岩や石に腰をかけては休みやすみ、何でも上をみずに、氣長に、少しづゝ登るに限るといふ、強力の言葉にしたがひ、のぼつては休み、やすんでは登りましたが、この時の樂は、たゞ頂上へつきたいといふ遠い希望と、休んだ時にズッと下界を見おろす愉快だけでした。（一面に綿のやうに、脚下に群がる雲の間から、箱根、愛鷹などの諸山が、わづかに頭を出してゐる樣は、まるで小さな箱庭

でも眺めるやう、自分の身は、さながら、天界に遊んでゐる天上人のやうな氣持でした。)

か様なことを、くりかへして、登りのぼつて行きますと、まあ雪！谷のやうに少しくぼんでゐる所、なかなか廣い場所一面に、眞白に反射してゐる美しさ。强力は、これが八合目の上にある萬年雪ですと敎へてくれました。あまりの珍さに、取つてもゆきたいのですが、今の場合、もう、そんな勇氣はありませんで、只、かへりにしませうと、少し休んで登りました。まあ、九合目までの途の長さつてございません。しかも九合目の室は、近頃なくなつてゐるとの事ですから、これから頂上までは、もう室へはいつて、ゆつくりと休むことは出來ないのでございます。

下からあがつてきます行者などは、大抵、先になつてしまひますが、そんなことには構はず、二た足いつては休み、三足いつてはやすみ、まさかこんなでもございませんでしたけれども、息のきれて苦しかつたこと、實に只金剛杖を力にのぼるので御座いました。

前に麓の方であつた、威勢のよい書生さんたちが、ドンタクがあつたといつては休んで居た、そのドンタク道さへ、こゝへ來ては容易に見つかりません。

やう／＼のことで、もと、九合目の室のあつた所へつきました。そのちき右の方に、パッと白いものがみえましたので、よく見ますと、これも雪でした。萬世不滅の雪が、日に反射してゐる色の、實に美しいではございませんか！

(二) 胸突八丁

九合目から、又餘程のぼりますと、路のわきに、大きな溶岩が、恐ろしく長くつゞいて居ります。風などのはげしい時、このかげにかくれたらよいだらうと、おもはれました。名をきゝましたら、面白いではございませんか、これが屛風岩だとのこと、はるか右の方をみますと、寶永山は、もう、私たちの居る所よりもひくく、ちよつと頭ばかりを、だして居ます。

それよりこちらに、おもしろい形をした岩が、ヒョコリと突きでてゐます。强力は、これが獅子岩といふ岩

だと、敎へてくれました。

そこを通りすぎて、すこしゆきますと、さあ、これからが胸突八丁です。

私どもの、ぢき前の方に、恐ろしく、きつたつてゐる胸突八丁の嶮！富士山第一の嶮路は、いよ〳〵近づいたのでございます。

もう少しだと、勇を鼓して、あへぎ〳〵登りゆきますと、胸突の、すぐ手前には、少しの間、平らな道があります。そら、ドンタク道だ、こゝで一と息休んでから、いよ〳〵嶮路をよぢのぼらうと、しばらく、道ばたの岩に、腰をかけて、やすみました。この胸突をこせば、もうすぐ、頂上がみえて居るのでございますから、こゝで、大いに勢力を養つておかうといふのでございました。

いよ〳〵胸突へさしかゝりました。時に午前十時四十分。まことに、有名な嶮路だけありまして、太古、すさまじく溶けて流れたと思はれる岩石の、突兀として峙つおそろしさ。片手は杖、片手は岩にすがつて、殆

ど四つ這の様になつて登るのでございます。この間を胸突八丁といひますが、ほんとの長さは、たゞ二三丁にすぎませんが、平地を八丁歩く位の、時間がかゝるのださうです。凡そ五六度も休んで、やう〳〵、この嶮をこし、時計をだして見ますと、十一時七分をさして居りました。即ちこの間に、二十七分を費したので御座います。

仰ぎみれば、頂上への上り口は、すぐ頭のところにみえて居ります。もう一と息と勇氣は百倍して……

頂上へ登るか否や、われしらず、萬歳を三呼したのでございました。實に身は、今、海拔一萬二千余尺、雲にそびえたつて居る、本州第一の高山の絶頂に立つてゐるのでございます。俯して下を見れば、自分は、どこをまあ、こゝまで登つてきたかとばかり、濃い霧が一ぱいで、少しもみえません。何となく、下は千仭の谷になつてゐて、その底が、深い〳〵海であるかの様な氣がしたのでございました。

（三）　頂上―内院めぐり

まづ入口には、鳥居やうのものがありまして、そこに、鐘がつるしてございます。強力は、こゝで、鐘を二つ三つ打ちならして、私どもに、杖に頂上の印を捺して貰ふ樣にと、教へてくれましたので、めい〳〵の杖に、赤い頂上の印をおしてもらひました。そしてなほ、おみやげに、印のおしてある、木の箸をかひました。

その奥に、淺間神社が祭つてございます。

石室の中には、茶店のやうなのや、お札、繪はがきなどの土產物や紀念品を、賣つてゐる所がございます。

私たち一行は、まづ茶店にはいり、頂上の名物といはれる甘酒を、一ぱいづつのみ、かねてまづいとは聞いてゐましたが、心のある、頂上の御飯をたべてみるのも、話のたねになるであらうと、これも試みました。

その御飯には、餅米がはいつてゐて、今年は、ずい分上手な飯たきを雇つたと、そこの主人が、吹聴してゐただけ、思つて居たほど、まづくもなくたべて、こゝで賣つてゐる、紀念のゑはがきを買ひ、持つてきたゑはがきへも、印をおして貰ひ、その隣にある室へいつ

てお札をかひ、少しやすんでから、強力をつれて、いよ〳〵お鉢めぐりに、出かけたのでございます。

このお鉢めぐりといふのは、内院といつて、噴火口に沿つて、すぐそばをまはるのと、頂上にある八つの嶺の外の方をまはるのとの、二樣があります。

強力の話すところでは、内院めぐりは三十六丁、外の方は五十町あつて、内院めぐりの安全なのにひきかへ、外の方は隨分危險な道もありますから、かへつて内側の方が利益であらうとの事。そこで私どもは、内側をまはることにきめて、みち〳〵、強力にきいた通り、内院のまはりにある峯々の名をおぼえようと、幾度もいくどもくりかへしていつてみました。

順に左の方から右へかぞへて、一番高いのが劍ケ峯、それから釋迦ケ岳、藥師岳、文字ケ岳、次に旭岳、駒ケ岳、雷ケ岳の七つが、おもな峯の名で、そのうち、劍ケ峯には、かの野中至氏の籠られた所があり、文字ケ岳にはその測候所、旭岳には拜み所といつて、内院を拜む所があります。その近邊には、塞の河原といふ

噴火の名殘を留める所もございます。

私たちは、やがて、雷ヶ岳の麓を越え、登つて野中氏のあとをみようと、又も息をきつて、劔ヶ峯の絶頂にのぼりました。あゝ自分等は今、本州に於ける第一の高山の、しかも、その最高峰の絶頂に立つてゐるのだと、小兄は、壯嚴な噴火口を眼の下にみおろしながら、快絶壯絶を叫んだのでございました。どこを見ましても、壯嚴、雄大といふより外はございませんでした。それから少しひくい所に、野中氏の籠られた石室を訪ひました。造りはなか〳〵堅固に、入口は、上に、木の太い格子があつて、その下にかたく戸がとざしてありました。前は直ちに斷崖になつて、深き谷の底からは、モヤ〳〵と霧が昇つてゐるのでした。

石室の戸のすみの所に、多くの來訪者の名刺が、釘にさしてのこしてありましたので、私ども、紀念のためと、住所姓名月日をかいた名刺を、その釘にさして、野中氏冬籠りの時の事など迭に談りあひながら、やがてこゝを下りて强力をさきに、壯大な噴火口を右にみて、話し興じながら歩みました。

その火口の中ほどに、巨大な石が、斜に落ちかゝつたのと、底の方にあるのとが、三つばかりみえましたのを、あれが、昔、木花咲耶姫が、腰をかけて休まれたと、いひつたへてある石だと、さし敎へてくれました。忽ち、ザーザーッと、瀧でもあるかの樣な音がきこえましたが、いくら見まはしても、瀧らしいものはみえません。あまりの不思議さに、きいてみますと、火口の底の方に積つてゐる澤山の雪が、少しづつとけては雪なだれの樣になつて、流れおちるのだとの事。實にすさまじい音でした。

釋迦ヶ岳、藥師岳などを左にして、その麓の方を一ばん低い平な所へきますと、こゝに金明水があります。そのすぐ傍に、神道丸山敎の本山といふのもございました。この時、空は大分曇つてまゐりましたので、少し急いで、そこから又文字ヶ岳を登り、その頂につきまして、觀測所の有樣を見ました。折から、大粒の雨が、ポツポツと、おちてまゐりましたので、ゴザも笠

も八合目の室に預けて來た私たちは、氣が氣でなく、大いそぎでこゝを出ました。雨はいよ〳〵降りまさつて、雨やどりする所もない私どもの着物はビッショリになつてしまひました。かさね着した袷の袖などがしぼれるやうに。いそぎにいそいで、四方をみる暇さへなく、漸くのことで、甲斐國吉田への降り口にある室へつき、こゝで、しばらく雨をやますことにしました。

こゝには、二人の男の人が居りまして、いろ〳〵寫眞の器械などがございました。富士山頂の寫眞をとる人たちであらうと思はれました。

しばらくして、雨も小ぶりとなり、霧もはれてまゐりましたから、あまりおそくならぬうちにと、又、こゝを出かけました。

空模様が、安心してゐられませんので、拜み所へよるのはやめて、近道を辿つてまゐりますと、とある崖の所へでました。こゝは少しあぶない所で――尤もごく少しの間ではありましたが――岩をよぢて登らなければなりません。

もし、この時、一歩はづせば、身は忽ち、崖へころがりおちるのでございます。強力の注意と手つだひとによつて、一人一人、この嶮路をこえました。

このあたりは、霧といつしよに、硫黄の氣が、うすい煙のやうにたちのぼつて、そのいきで暖く感じますのが、何となく恐ろしい樣にもおもはれました。岩の下の穴の樣な所へ、手を入れてみますと、なか〳〵暖かで、また、火山のほとぼりの、いきをふいて居ります。

それから、塞の河原を通りながら、いろ〳〵のことを、強力にきいて、やがて、銀明水のある所へでました。

そこは丁度、御殿場からの登り口になつて居ります。

それから、駒ケ岳の岩の道へ、梯子のかけてあるのなぞを、左にみて、やう〳〵前の、室や神社のある所へかへつてまゐりました。時計の針は、正に二時三十分をさして居りました。私どもは、内院を一週しますのに、一時間と十五分かゝつたのでございます。

富士山を下る記

深尾範二

さあ之れからが下山である。お札も買つた、繪葉書も買つた、草鞋の紐を〆め直して、時計を見れば丁度三時だ。さらばよ、富士山巓、永久に汝が威風を保て。オ、秀でたる日本の表示！

下山に對する案内者たる强力の言葉の、あまりに樂天的なるを思ふて、予等はさすがに氣支ふたのであるが、事實はより多く予等の期待を破つたのである。予等の味ふたる最初の走り道は胸突八丁である、一瀉千里とは眞に之れである。思ひ見よ、一歩に息つぎ、二歩に喘ぎ、三歩既に腰を下しつゝ二十有七分を費して越へたるの險道は、今僅に五分を費さずして、既に後へに打霞めるに非ずや。遙かに突兀たる巨岩は「汝等に再び來るの勇ありや」と笑ふにも似たり。嗚呼富士山は登るべからずして、下るべきの山なりき。乞ふ暫く我れに對する笑を納めて、事實に徵されん事を。

かくて予等は引返へして大宮口の八合目まで下りぬ、時に三時四十分。登るに要したる時間の五分の一に足らぬのである。頂上を發する頃より立ち初めたる霧愈々深うして、興愈々加はりぬ。只驚きたるは草鞋の脆き一事である。御鉢廻りの半ばにて更へたるものは九合に至る半ばにて既に破れ、八合目に至りて再び新たに一足を要したのである。愈々實際の走り道に掛つたらばと、予等は思はず顔見合はさざるを得なかつた。八合目の室に預けし荷物を受取りて休息する事半時、强力の切なる保證と、勸めとによりて、予等は山を横ぎりて御殿場口の七合目に至るに決した。そは大宮口の不潔なる寢具と、粗惡なる食品とに閉口したるのみならず、御殿場口の、下山に、より容易なりと聞いた結果である。

室を出づれば、霧は益々深く視界數間の外に出でずして、復た足下の大パノラマを見るに由なし。下より吹き上ぐる風絶へずまに來りて、茣蓙も物かは、全身より、滴る滴、それが又霧となつてどこともなく吹き上

げらるゝのである。『雨が足下から降る』とは予等の耳にした事であるが、多分此所らの事をいふたのであろう。予等が頂上で實際會つた雨は、やはり上から降つたのであつたものを。八合目の室より上る事十間計りで愈々横道となつたのである、其處には勿論道といふ道はないのであるが、幸にも予等が雇ふた案内者たる強力は、既に二十五年餘の年月を其職に費やしてゐるといふ老武者である、『富士山は私の頭の中にあります』といふた、彼の言は決して過言ではない。此の屈強な案内者によつて予等は斜めに、或時は踏みこたへなき燒砂に、ずる／＼と危く踏み止まり、或時は兀々たる溶岩の流れに金剛杖を立て、御殿場口の道に達したのは四十分許りの後である。

『もう大丈夫で御座います』とは案内者の口より出でた最初の言葉であつた。莫蓙着たる脊中の、さすがに帶より上は乾けるも、他はすべてビショ濡れである。袖を絞れば水につけた布の樣に流れ落つる不快さ。何となく眼ぶたの硬ばる樣なので、妹の顏を覗けば、奇觀

！彼女の睫毛といはず眉毛頭髮、尖端皆な之れ氷の玉、銀の光り、予の言葉に皆々顏見合せて打興ずるも又、時に取つての慰みであつた。

かくて其處に休憩する事數分、愈下山の途に就いたのである。二丁許り行くとすぐ側の谿に四尺計りの積雪が、皚々として千古の銀色を保つてゐる。第一番に驅け寄つたのは予であつた、手を以て鬪き取らうと試みたが、既に雪でない氷に、手は千切れそうなので、今度は杖を振つて打ちたゝけば、杖ははねかへりて、三四尺彼方に飛ぶ。しびれた兩手を口に當てれば、彼方にどつと起る笑聲のいま／＼しさ。かくては果てじと再び杖を取つて、漸く半斤計りを取つて、一かけ口に入れた其の時のうまさ、甘露！と予は叫んだのであつた、やがて一行の所へ持ち返つて、乾ける喉を醫やしたのであつた。

程なく一行は八合目に達した、が、下りの愉快さは休息したいなどの心も起らず、無論此の室もサッサと通り拔けたのである。それから少し行くと後から一人の

老女の、行者—といふのはその風裝によつて知らるゝ—が予等一行に追ひ付いたと思ふと、一寸言葉を交はしてやがて先に行つて了つた。多年山に馴れたらしいその足の運び、二足の草鞋を十字に結付たるその足取の早さ。之れに勵まされたる予等一行は、更らに勇を鼓して、途中七合半にて各々破れたる草鞋を新にして霧を突いて遂に七合目の室に着したのは午後五時二十五分であつた。

名にしおふ强力の受合つて勸めた室だけに、家も大きく、且つより清潔である。之れならばと、婦人連も幾分か安心して、早速草鞋を脱いで、今宵一夜を此所に明かす事とはなつた。

何しろ寒くて堪らない、火だ、火だ、といふので、此處に七りんに一杯の火を貰ひ受けて、一行四人之を取卷いて盛んに衣服を乾かしてゐた。其處へ折から着したのは、一隊九名の外國人一行である。突如として起る萬歲の一聲に、戸口を見れば、凡そ十四五才と覺しき一少年、半ズボンに草鞋の裝束かい〴〵しく、今先

登第一の功名を博した得意の面色、外套脱ぐ手も遲しと投げすてゝ、戸口に立ち出でつ、何か聲高に英語もて叫ぶに、間もなく三十前後の一人の婦人を先に、どや〳〵と五人の婦人（内一名日本女學生）が入つて來た。最初先登の少年が入つて來たとき、彼れも普通の外人と思ふて、少しは英語學びたる予には、何となく義務の如くに思はれて、二言三言慰めの言葉を發したるに、反つて流暢なる、而かも小供らしき快活なる調の日本語もて答へられし時、予は思はずも赤面した、で、殘る二人の、一人は既に五十に近からんと思はるゝ牧師らしき人も着して、彼等も又庭に焚火をして、ぬれたる衣類を干し初めた。

予が此所に特筆したきは、其夜予等一行、否その夜其處に泊り合せたるすべての人々の、彼等一行より破りし迷惑である。その人々はいづれも今日一日の步行に勞れておる人々で、殊に七合目といへばまだ山の中腹以上であるから、登るも降るも、未だ明日の勞苦を思ふて、夕飯も早々、七時頃には殆んどすべての人が、

所謂壽命の豐年をして七八年も持つだらうか、夫れも分らぬ。斯うなると又一問題が起る。聞けば十三年も病院に居つて遂に死んだといふ同病者もある。コレではどうも十三年間病院に居る爲めに生きて居るやうなものだ。養生はせねばならぬが、シカシ空しく十三年の歳月を病院で暮らして死んだのでは、養生の意味が分らなくなつて來る。イナ人生の意味が分らなくなる。もはや此場合には醫者は相談相手にならぬ。相談すれば何日までも規則的養生を繼續せしむるのみである。僕のこゝまで快くなつたのも單に醫藥の効のみで無い事は前にも述べた通りである。醫者の病人に對するのは、道具の損じを直して居る職人か何かのやうに思はれてならぬ。尤も醫者盡くがさうとは言はぬが、隨分コンナのもある。慢性の難病に罹かつたものが醫者を擇ぶのは、道具の損じと見ずに人間として接して呉れる同情ある醫者で無くてはならぬ。官等だの博士だのとソンナ、●●などコケ威しの看板はどうでもよい。序に今一つ注意して置きたいのは、新式治療法だの或は山師

流の賣藥の廣告などには、目も呉てはならぬ事である。僕は遂に思案を決めた。力相當の仕事に就く事にした。夫れは單に名利の爲めで無い即ち十三年養生、而て無爲に死ぬといふやうな事が嫌だからである。無論養生を怠つてはならぬ。極簡易なる養生法の數則を擧げて見やう。名利の念を淡くする事、食物を成るべく多く喫ふ事、性慾を去るにつとめる事。細かく言へば限りの無い事だが、徒らに箇條が多くては實行が出來ぬ。此上は無暗に他の健康を羨んではならぬ。自分の短命を嘆く事は大の禁制である。何の事は無い、他人の一ケ月分の樂みを自分は一週間で享けるとすると、約四倍の興味を持てばよいのだ。此勘定で行くと自分の一ケ年は他人の四ケ年に相當し、自分の五年は他人の二十年に當り、これから五六年も生きると、他人がウカ〳〵と二十年も二十五年も生きたのと匹敵する。ものも考へようで前途遼遠になり、春秋に富む譯になる。其代りに一度苦悶すると他人が四度のソレと同じ割合だから此邊も工夫して夢々ツマラ無い事に懊惱しては

ならぬ。僕は斯う覺悟して樂んで餘命を送る事にして居る。これは實際である空談では無い。斯うなつては病氣に勝つたのである。全快したのも同樣である。

同病者諸君よ、この頃の新聞に熱海繁榮策といふものが載つてあつた。夫れは斯うである同地の旅宿業者が決議して肺病患者を一切宿泊させぬ事にした。若し知らずに宿めてから、アトで分つたら、有らゆる冷遇●●●●を加へて病人が我慢し切れずに立腹して去るやうにする。外の家へ轉宿する、又同じ事を遣るといふ仕向けだそうな。是れでは吾々はどうしたらよいのでせうか。シカシ公衆衛生上止むを得ぬ事として、決して不平は言へぬ。今に汽車に乗る事も出來ぬやうになるかも知れぬ。けれども社會からドンナ冷遇を受けても愚痴をこぼしてはならぬ。落膽してはならぬ。吾々は常に注意して他人に傳染せしめぬやうにせねばならぬ。普通の智能を具へた人が各自に注意をすれば決して傳染するものでは無い。此間も他人に傳染しては濟まぬといふので自殺した青年があつたが、其心情は憫むべきではあるが、さりとて、狹い了簡ではないか。自殺する程の決心で以て注意をすれば、恐らくは人に傳染させるやうな虞はあるまい。僕は一人も他に及ぼさないやうに心懸けるのを最大の義務と心得て居る。ソシて短い命で長い命と同樣の効果を收めるやうに、安んじて仕事に就いて居ります。

希くば多數の同病者諸君、いつまでも悲嘆にくれずに、一旦落膽しても更に新しき力を得て、各々境遇に安んじて、努力せられよ。自分の生命の價値は自分で無くては分らぬ。短くても銘々に自愛して、夫々力量相應の務めをしようぢやありませんか。

（完）

＊　＊　＊　＊　＊

記者いふ。吾人は終始深き同情の念を以て此の文を見た。有隣君は文に嫻はざるの故を以て、太く此の記事の拙きことを懸念せられたれども、吾人は寧ろ此かる虚僞なき眞情の文を見る毎に、所謂文學者の名文以上に、感動せしめられて、惻々の情に堪へぬものである。熱海の溫泉宿の決議なるものを見て、泣かずに居られる人があるか。吾人は肺病患者諸君の爲めに悲痛の涙を催すと同時に、イツ何時、予等も亦此の排斥せられて五尺の軀を置くに處なき同病者となるかも知れぬといふことに思ひ及んで、現世の淺ましさ、果敢なさを痛切に印象し來るのである。あゝ無情なる健康者!!誰かよく病の來襲に抗し得るものぞ。あゝ（韶）

枕に就いたのである。所が生憎と泊り合せたる名だゝるアメリカのチヤターボツクス、と予等は認めた——である、室に入るが否や、喋々としてその喧しさ。殆んど九時半頃に至るまで、殊に耳馴れざる彼女等の話聲に、一人として眠れる者はなかつたのである。此の公共の場所に於て、衆人の迷惑をも顧る所なくて、思ふがまゝに振舞ふ彼女等の行に對しては實に呆るゝの外はないので、日頃彼等の口巾たき迄にいふ所の公德はどうした、公共心はどうしたと言たくなるのである。

夜はかくの如くにして更け、そうして明けた。予等が眼醒めた時には、彼等外人の一行は既に床を離れた所であつた、で、相も變らずペチヤ〳〵とやつておるのである。強力の呉れた水土瓶と、一つの茶碗とを提げて外へ出れば、霧は今朝も四方を立て籠めてゐたが、やがて少しく晴れ渡つて東の空は見事に彩られて表れた。けれども滿天の雲にさへぎられて、今朝も遂に莊大なる日の出の景を見る事が出來なかつた。で、持つた茶碗に水を注ぎ、猫式の洗面をすまして、内へ入ろ

うとすると丁度出て來たのは彼の少年、快活に挨拶を交せば、少年は手にせる寒暖計を示すので、再び外に出て立つ事五分、寒暖計は四十六度にまで下降した。予はさすがにと思ふたのであつた。

かくする内、追々人々は出立つて、外人一行も出て了つたので、予等も早々に拂ひをすまして、此所を出たのである、時に午前七時三十分。

今日も一日霧は晴れぬといふ強力の注意に、身仕度も堅固に、走り道にとて注意深き強力の、大宮より携へたる、仁王樣でも穿きそうな、而かも驚くべき程丈夫な草鞋に、尚ほ古き一足を横に結付けて、愈々本式の走り道に掛つたのである。最初予等の腦中に畫きし走り道なる者は、急坂直下、少しく足をすべらせば、忽ち數尺を下るべく、危險も從つて多かるべしといふのであつたが、事實は大いに反して、實に愉快極まる者であつた。サク〳〵と踏む砂の音、まづ予等に非常の快感を與へた者は之れである。左を見れば登り道のうね〳〵として、そを登り行く人の、さも足重げなるも

氣の毒である、右には寳永山高く聳ゆるも面白う。予は自分の樂しさにうか〳〵と、好める歌など口吟して、今から空元氣を出してはと遂に兄の注意を受くるに至つた位ゐであつた。予等は此の霧中を突いてひたすら下つた。その三合目の室に達したのは八時半、時を費やす僅かに一時間である。以てその走り道の如何なる者かを察する事が出來よう。

一行は此の室に入つて、互に、無事に我が企ての半ば以上を了へた事を祝し合ひつ、茶など喫しつゝ、二十分計りの後再び此所を立ち出でたのである。

此三合目に至る前予等の眼を悦ばした者はイタドリの只一色綠なる葉であつた。三合目以下は道は追々固くなり、勾配も餘程緩くなつて居るのであるが、尚依然たるサク〳〵の燒原である。植物は既に鬼アザミ、イタドリの外に、種々なる草花が生ひ立つてゐる。霧の中に案内者を見失はぬ樣勉めて步みを運びつゝ、程なく二合二勺の馬返しも過ぎて、二合、一合を越して、遂に御殿場口の門ともいふべき太郎坊に着したのは午前十時十五分、三合目より一時四十五分間、七合目より實に二時四十五分の少時間を以て着したのである。此所に予をして繰り返へさしめよ。富士は登るべからずして、下るべきの山である。

太郎坊に來た時は丁度東京府立第三中學の生徒が、凡そ百二三十名計り晝食の最中であつたのでどうする事も出來ず、暫く彼等の出立を待つて、此所に大宮以來の、而かもさ程『水のよすぎ』ぬ飯に舌鼓を打ちつ、此所にて三たび目の東表口改の燒印を金剛杖に貰ひ、仁王樣の草鞋も目出度此所に納めて、午前十一時といふに此所を出たのである。

それより何處までも單調のだら〳〵下りの直線の道をたどつて、途中一本松の掛茶屋に、『鹽ッパライ』大福餅を味ひ、或は道ばたに實れる草苺を摘みなどして御殿場の町へ入つたのは午後三時四十分であつた。顧れば我等の來し方は深くも雲と霧とに閉されて、富士はその莊大なる雄姿を示すを拒むが如くである。停車場前の御殿場館と云に入り、其處にて强力に賃錢を渡し、彼が連日の勞苦を犒ひつ、予等四人は此所に三日間の汗を洗ひ、夕飯をすまして後、予は午後六時五十五分の汽車に投じて、九時三十一分興津驛着、此所に吾等が旅程を了たのである。我等が生涯の話草と成るべき富士登山の企は此所に目出度終を告たのである。明治卅九年八月九日は予に取て一大紀念日と成たのである。(了)

山容水色

深尾 韶

◎山の容、水の色、人の心、世のゆくさま。十日の旅も尙ほ此の多くの學問が我等の前に展開すなり。嚴かなるは山の心、やさしきは行く水、人の世の奇しきを、われは此度の行に學びつ。

◎八月六日東京を去りて、九日に富士山を下り、うちよする駿河の國、興津の海岸に幾日かを過ごして、十六日の夜、あつくるしき東京に歸れるなりき。

◎汽車に乘りては、玉の如く美はしき令孃令息の、父母に携へられて旅に行く幾組かを見つ。倏ちにして彼の茅屋の裡、食ふに糧なき貧兒の上に想ひ到りて、孰れが幸、いづれが不幸なりやなど、考へて見る。あゝ此の華美に育つ令孃の生涯や如何に。令息の行く末や如何に。

◎汽車の三等室は客を入れきれず、腰掛なきまゝ立盡せる人もあり。二等、一等の室は、室を狭め切れず、

客なきまゝ空にて運轉せるもあり、世は樣々なるものなるかな。

◎家には床の間、客室と美々しく飾り立てゝ、而して小兒や女中や妻君や夫や、小さき居間、臺所、玄冠に不愉快にして且つ陰欝なる生活を送る人あり。これも亦、世さま〴〵の一つ也。

◎富士の裾野を走る鐵道馬車あり。絶えず爪先上りの勾配なれば、歩きても尙ほ共に行き得るほどの遲さなりき。足の丈夫さうなる男の呟きて曰ふらく、『こんな馬鹿々々しい馬車は初めてだ』と。馬もし得言ふべくば又『こんな馬鹿々々しいお客は初めてだ』と呟くならん。金を有するものは何が故に馬車に乘らざるべからざる乎。金を拂はれたるものは何が故にお客を乘せざるべからざる乎。お互に迷惑しつゝ、尙ほ乘り乘らるゝの關係を絶つこと能はず笑止の世や。

◎金や何！。これなくては一日も生くる能はずと人は云ふ。さばれ我は金によりて今世に生まれ來りしものに非ず。金てふものゝ存在以前に、既に我が生命はあ

りき。われは金によりては生きず。金や何?。唯わが生を煩はさんが爲めに惡魔の案出せし惡戯に過ぎず。

◎勞働や何?。人は金を得んが爲めに勞働す。さばれ我は無爲にして在ること能はざるが爲めに勞働す。我は天賦の生命を與へられて既に生くるの權利あり、勞働は我が生存の權利のみ。金錢と係はることなし。而も金錢＝生存＝勞働と奇怪なる關係を案出して、我等を其の鐵鎖に縛せしものは誰ぞ。情なの世や。

◎妻あり、臺所に勞働す、而も未だ一錢の報酬をだも要求せず。子等あり、毬投、かけくら、飯ごとに勞働す、而も未だ一錢の金に思ひ到らず。夫たり父たる人あり、金を獲來り、衣食を齎らす、而も尙は妻子に向つて何の課する處もなし。笑止の世、情なの世にも、かゝる美くしき家庭は在り。

◎美くしの家庭!。人は皆之を戀ふ。されど此の小さき家庭、竟に何の用をかなす。一歩踏み出せば、外は波風あらく、猛獸毒蛇の爪と牙とを磨する、淺ましき『世間』にあらずや。あゝ此の大なる世間と小なる家庭

とは畢竟如何なる關係を保つものぞ。小、大を化せずんば、大、小を呑まん。美くしの家庭主義を擴めて、淺ましの世間を霑はさば、如何に吾人の生活は幸福となるべきぞ。然るを此の小城廓『家庭』の中に長夜の眠りを貪りて、『世間』の洪水の既に脚下に迫り來れるを知らざる人は、實にも痛ましき人なるよ。

◎富士山に强力といふ勞働者あり、百方苦心して客の財物を貪らんとす。此の慘憺たる苦心の結果に成れる彼れの收入も、家族の衣食住と、小さき奢侈との費用を除きては、一錢の剩す所も無き也。彼れ客を貪る事を止め、酒屋と呉服屋と米屋と、彼を貪る事を止めば如何。彼れ金錢を取る事を廢し、金錢を支拂ふことを廢すれば如何。取つて出すと、取らずして出さゞると、結果は一にして、剩す所は只手數の有無のみ。此の無益の手數を惜まざる短視者は獨り强力のみにあらず。すべての人今日一齊に之を爲しつゝあり。取つては出し、出しては取る。畢竟はゼロなるものを。差引勘定も知らず、爲換法の便利をも知らぬ愚かしき時なり世なり。

◎家庭の中に一々金錢の授受をなさば如何。淺ましき累はしき馬鹿々々しき事ならずや。予は世人の一齊に此の愚しき收支制度より覺めて、速かに金錢てふ惡魔の玩具を廢滅し、萬人相率ひて樂しき大家庭に入らんことを切望す。

◎富士に石室あり、登山者の休泊と食事とに備ふ。主人の親切ぶり、金なくて斯からばと思へり。

◎その石室に宿りし夜、四五人の婦人と三人の男子と一團になりしアメリカ人の一行も宿りてありき。饒舌箱を引繰返したらんが如きアメリカ婦人の騷々しさ。同宿の人は稍姑らく眠ることも得せざりき。日本婦人の沈默がちなるに比ぶれば、雲泥の差。唯だまりたるも不愉快なれど、人を人とも思はず、公共の場所に於て人の迷惑を愉快がほの饒舌も、堪つたものにはあらずかし。伴の男、夫も許嫁もあるなるべし、十年の戀一時に褪めもはてぬにや。

◎宿屋の生活ほど樂しからぬは無かるべし。彼方は只客を泊らせて、其口に物を押入るれば足り、此方は只

疲れたる軀を横ふる場所とのみ思ふ。宿屋の生活は人情を解するものゝ一箇月とは耐ふる所に非ず。

◎一家族うちつれて興津の海に滯在する人あり。冷たき宿屋に温かき家族の愛を包みて、湯の中に氷を入れたらんが如き情を味ふも、亦時にとりての興なるべきか。

◎山は笑ふに宜しく、海は泣くに適せり。富士を降りて興津に、そゝり立つ巖の明けゆく光を見れば、引入れらるゝが如き波の暮れゆく聲も聞きつ。小悟、小悟、人の言ふなる人生の鍵にちよつと探りあてし心地もす。

◎記者等興津滯在の砌、八月十六日午前、興津名物の一つと算へられし『農商務省農事試驗場園藝試驗地』を訪ふ。長官は新進の農學士、熱心と懇切とを以て聞こえし恩田鐵彌氏なれば、記者等は此處に珍らしき多くの智識と趣味とを見出し得べしと、暑さを冒して場に到りぬ。門前には、何人にも自由に縱覽を許すべきことゝ、刺を通じて案内を請ふべきことゝを揭示しありたれば、式のごとく玄關に至りて、住所姓名職業を認め

たる名刺を差出して來意を告げたるに、思ひきや、出で來りたる事務員らしき男は、只『御自由に御覽下さい』と言ひ放ちたるまゝ、何やらん帳簿をくりひろげて、案内などしてくれさうもなかりし。不知案内の記者等は此の廣漠たる場内を如何に見るべきや、日蓋さへあらぬ此の炎天の畑中を如何にして廻るべきや、殆んど途方にくれたりしが、かくてあるべきにもあらねば、先づ附近の温室らしきに入りて、わづかに葡萄（名は知らねど）の枝もたわゝに生りたるを見つ、彼方にも此方にも當惑げなる縱覽人の、暑さに行きなやみたるを見ては、バカ〱しき感の起りて、歸らんとする途に、トマトの摘採されたる籠幾十かを並べたる室あり『土産に少し讓つて頂くことは出來ますまいか』と聞けば、『今調査した上で上げませう』との答。採りたての紅なる、黄なる、樣々の形したる幾色、よき土産と思へば、調査の濟むを待つて見つ。若きお役人樣、土間の眞中に蓆を敷きて、わらじの足を、ドッカと投げ出して、さて『三月十日播種、十五個、三百七十匁、内無疵五個、大三十六匁、中二十四匁、小七匁』と呼び上げては、一々帳簿に記入するさま、なるほど天下太平のお役人樣の仕事なりと、覺えず感涙に咽びたりき。併し如何に感涙に咽びたりとて時間の長きを短かしとは感ずること能はざりしが故に、強て欠伸を噛み殺し、お土産話を取消しにして、這々の體にてそこを辭し出でたりき。

◎名は知らねど、幹と直角に枝の左右に出でゝ垣の如くに作られたる多くの木を見たり。路の傍にも、家の横にもあり。器械か作り物の樣に、こんなに生きた木をおもちやにして、興津あたりで一年中遊んでゐたらさぞ面白きことなるべしと思ふ。

◎暑中休暇などにて、場長は不在にてや在せしならん。記者等が折角の希望も徒になりて、讀者諸君の前に何等の面白き園藝談をもなす能はざるは、稍や遺憾の思ひなきにあらざるも、又も此の試驗地を訪ふことあらば、其時こそ恩田氏とも談りて、お土産ばなしをも爲し得るに至らんことを希望する也。

同病相憐の記（下）

有隣生

僕の病氣の再發したのは昨年の春で、そして其夏の日記に斯う記してある、世の同病諸君に當時の心情を飾り無く語りたい爲めに拔萃する『六月十五日、旅より歸りて下の關に上陸す。胸痛、咳嗽、喀痰等にて殆んど堪え難かりき。爾來發熱常に三十八九度、病勢大に進む。超えて七月三日、東京大學病院青山博士の診察は**既に治療に手後れなりといふ**。何等の痛恨、何等の絕望ぞ。五日杏雲堂の佐々木院長、八日友人堺氏の知己加藤ドクトル等の診察を受く。何れも重しといふに一致す』僕の失望落膽はこれで二度目なり。何ともハヤ慚愧千萬な事ではあるが、一度は屛息した病症が不用意の間に突然增進して、既に治療期の後れたりと聞いては、さすがに狼狽せざるを得無かつたので有ります。

それから十日ばかりは茫然自失の體で、何とも言ひやうの無い惡い心地で居つたが、遂に決心をして、再び此病氣と鬪つて見やうと思つた。實際夫れが最良の考へであつた。而て播州の明石海岸に移つて靜養する事にした。いでや病氣勝つか、我勝つか、身體上醫藥其他の手當、精神的養病等、恐らく是れが模範的養生であろうと自信してかゝつた。全くこの自信は必要である。斯の如くして居ればイカナ病氣も退かずには居れまいと信じて居ると、心持ちは既に病氣に打ち勝つて居るのである。模範的養生それは決して贅澤に逍る意味では無い。藥餌、食料、運動、深呼吸、海水摩擦等を規則正しく遣る。精神は如何なる場合にも安靜に保つといふ丈でよいのである。時は秋になつた。氣澄み水清き處で、日夕、自然の風物に接して悠々自適して居ると、何分心持ちが著しくよくなる。隨て病苦も薄らぐ。妙なもので初めの悲痛は追々と無くなつて來る。けれども、この位の事ではマダ本當に徹底して居ないので、只氣分がよい、病苦が少くなつたといふばかりで、一時悲痛を忘れて居るだけの事である。そう容易

に單純には行かない。故に[illegible]には非常に困難が多
動すること[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

分で苦い[illegible]が偶々吾人の[illegible]
して[illegible]一致して居る[illegible]最も愉快なものである。
[illegible]一年間[illegible]コンな事を繰り返し
[illegible]時間が或[illegible]までに
[illegible]

[illegible]

同病相憐の記（下）

有隣生

僕の病氣の再發したのは昨年の春で、そして其夏の日記に斯う記してある、世の同病諸君に當時の心情を飾り無く語りたい爲めに拔萃する『六月十五日、旅より歸りて下の關に上陸す。胸痛、咳嗽、咯痰等にて殆んど堪え難かりき。爾來發熱常に三十八九度、病勢大に進む。超えて七月三日、東京大學病院青山博士の診察は既に治療に手後れなりといふ。何等の痛恨、何等の絕望ぞ。五日杏雲堂の佐々木院長、八日友人堺氏の知己加藤ドクトル等の診察を受く。何れも重しといふに一致す』僕の失望落膽はこれで二度目なり。何ともハヤ慚愧千萬な事ではあるが、一度は屛息した病症が不用意の間に突然增進して、既に治療期の後れたりと聞いては、さすがに狼狽せざるを得無かつたので有ります。

それから十日ばかりは茫然自失の體で、何とも言ひや

うの無い惡い心地で居つたが、遂に決心をして、再び此病氣と鬪つて見やうと思つた。實際夫れが最良の考へであつた。而て播州の明石海岸に移つて靜養する事にした。いでや病氣勝つか、我勝つか、身體上醫藥其他の手當、精神的養病等、恐らく是れが模範的養生であろうと自信してかゝつた。全くこの自信は必要である。斯の如くして居ればイカナ病氣も退かずには居れまいと信じて居ると、心持ちは既に病氣に打ち勝つて居るのである。模範的養生それは決して贅澤に遣る意味では無い。藥餌、食料、運動、深呼吸、海水摩擦等を規則正しく遣る。精神は如何なる場合にも安靜に保つといふ丈でよいのである。時は秋になつた。氣澄み水淸き處で、日夕、自然の風物に接して悠々自適して居ると、何分心持ちが著しくよくなる。隨て病苦も薄らぐ。妙なもので初めの悲痛は追々と無くなつて來る。けれども、この位の事ではマダ本當に徹底して居ないので、只氣分がよい、病苦が少くなつたといふばかりで、一時悲痛を忘れて居るだけの事である。そう容易

に單純には行かぬ。故に折にふれては非常に感情が發動する。極端の悲みへ沈む。今にも暗い死處に往きさうになる。斯んな時には強いて情を壓へやうとはせずに一切感情の馳するに任せて置く。今後の苦痛も極點まで想像して恐怖もする。生活狀態の極點に達した零落を想像して心配もする。今死にかけの心持ちにもなつて見る。先づ理性を交へずに感情の發動するがまゝにして置いて、身體のクタ〳〵に疲勞するに任す。而て或時日を經過すると復た氣分が直る。すると今度は理性がポチ〳〵頭を持ち上げる。コヽが最も大事の處で、此時に當つて前日來の放任せし感情の頗るツマラ無かつた事が分る。自分で自分を嘲る。自分を叱責する。自分を戒める。此の機微の間に一種の慰安を得る。嚴格なる意味の悟道で無くとも、幾分か悟つたやうな氣がする。僕は學問に據つて分ら無かつた人生の問題を、病軀の實地に於て圖らずも解決を見た事がある。專門的宗教哲學の知識の無い僕等が其學說を聞いたとて、ソレで直に安心立命の出來るもので無い。自分で苦み拔いて得たのが眞理で、夫れが偶々哲人の示したのと一致して居る時は、最も愉快なものである。

凡そ小一年間の明石の養生は、コンな事を繰り返し〳〵する中に、頗る好結果を得た。精神が或程度まで病苦に拘束されぬやうになつた。隨て病魔も暴威を逞くする力が減じる。胸痛も咳嗽も咯痰も殆んど無くなつた。體量も一貫目計り增した。治療に手後れだと言はれたのが、決して手後れで無いといふ事を證據立てた。醫者の說を否認するのでは無いが、醫者の一言に無暗に落膽してはならぬ、といふ事を同病者に告げて其意を強うしたいのである。僕が非常なる好經過であつたのは、醫藥の効もあらう。空氣の良かつた爲めでもあらう。滋養物の爲め、運動の爲めでもあらう。けれども是等以上に有力なる効能は、所謂精神的養生によつて得たものと信じて居る。

ソコで醫者に諮つて見ると、慥かによくなつたといふ。併し無論全治はして居らぬ。然らば今後何年ばかり生きて居らるゝか。さあ夫れは分らぬ。三年か五年か、

所謂壽命の豐年をして七八年も持つだらうか、夫れも分らぬ。斯うなると又一問題が起る。聞けば十三年も病院に居つて遂に死んだといふ同病者もある。コレではどうも十三年間病院に居る爲めに生きて居るやうなものだ。養生はせねばならぬが、シカシ空しく十三年の歳月を病院で暮らして死んだのでは、養生の意味が分ら無くなつて來る。イナ人生の意味が分ら無くなる。もはや此場合には醫者は相談相手にならぬ。相談すれば何日までも規則的養生を繼續せしむるのみである。僕のこゝまで快くなつたのも單に醫藥の効のみで無い事は前にも述べた通りである。醫者の病人に對するのは、道具の損じを直して居る職人か何かのやうに思はれてならぬ。尤も醫者盡くがさうとは言はぬが、隨分コンナのもある。慢性の難病に罹かつたものが醫者を擇ぶのは、道具の損じと見ずに人間として接して呉れる同情ある醫者で無くてはならぬ。官等だの博士だのとソンナ、●●コケ威しの看板はどうでもよい。序に今一つ注意して置きたいのは、新式治療法だの或は山師

流の賣藥の廣告などには、目も呉てはならぬ事である。僕は遂に思案を決めた。力相當の仕事に就く事にした。夫れは單に名利の爲めで無い即ち十三年養生、而て無爲に死ぬといふやうな事が嫌だからである。無論養生を怠つてはならぬ。極簡易なる養生法の數則を擧げて見やう。名利の念を淡くする事、食物を成るべく多く喫ふ事、性慾を去るにつとめる事。細かく言へば限りの無い事だが、徒らに箇條が多くては實行が出來ぬ。此上は無暗に他の健康を羨んではならぬ。自分の短命を嘆く事は大の禁制である。何の事は無い、他人の一ケ月分の樂みを自分は一週間で享けるとすると、約四倍の興味を持てばよいのだ。此勘定で行くと自分の一ケ年は他人の四ケ年に相當し、自分の五年は他人の二十年に當り、これから五六年も生きると、他人がウカ〳〵と二十年も二十五年も生きたのと匹敵する。ものも考へようで前途遼遠になり、春秋に富む譯になる。其代りに一度苦悶すると他人が四度のソレと同じ割合だから此邊も工夫して夢々ツマラ無い事に懊惱しては

ならぬ。僕は斯う覺悟して樂んで餘命を送る事にして居る。これは實際である空談では無い。斯うなつては病氣に勝つたのである。全快したのも同樣である。

同病者諸君よ、この頃の新聞に熱海繁榮策といふものが載つてあつた。夫れは斯うである同地の旅宿業者が決議して肺病患者を一切宿泊させぬ事にした。若し知らずに宿めてから、アトで分つたら、**有らゆる冷遇を加へて**病人が我慢し切れずに立腹して去るやうにする。外の家へ轉宿する、又同じ事を遣るといふ仕向けだそうな。是れでは吾々はどうしたらよいのでせうか。シカシ公衆衛生上止むを得ぬ事として、決して不平は言へぬ。今に汽車に乗る事も出來ぬやうになるかも知れぬ。けれども社會からドンナ冷遇を受けても愚痴をこぼしてはならぬ。落膽してはならぬ。吾々は常に注意して他人に傳染せしめぬやうにせねばならぬ。普通の智能を具へた人が各自に注意をすれば決して傳染するものでは無い。此間も他人に傳染しては濟まぬといふので自殺した青年があつたが、其心情は憫むべきではあるが、さりとて、狭い了簡ではないか。自殺する程の決心で以て注意をすれば、恐らくは人に傳染させるやうな虞はあるまい。僕は一人も他に及ぼさないやうに心懸けるのを最大の義務と心得て居る。ソシて短い命で長い命と同樣の効果を收めるやうに、安んじて仕事に就いて居ります。

希くば多數の同病者諸君、いつまでも悲嘆にくれずに、一旦落膽しても更に新しき力を得て、各々境遇に安んじて、努力せられよ。自分の生命の價値は自分で無くては分らぬ。短くても銘々に自愛して、夫々力量相應の務めをしようぢやありませんか。

（完）

* * * * *

記者いふ。吾人は終始深き同情の念を以て此の文を見た。有隣君は文に嫻はざるの故を以て、太く此の記事の拙きことを懸念せられたれども、吾人は寧ろ此かる虚僞なき眞情の文を見る毎に、所謂文學者の名文以上に、感動せしめられて、惻々の情に堪へぬものである。熱海の溫泉宿の決議なるものを見て、泣かずに居られる人があるか。吾人は肺病患者諸君の爲めに悲痛の涙を催すと同時に、イツ何時、予等も亦此の排斥せられて五尺の軀を置くに處なき同病者となるかも知れぬといふことに思ひ及んで、現世の淺ましさ、果敢なさを痛切に印象し來るのである。あゝ無情なる健康者！誰かよく病の來襲に抗し得るものぞ。あゝ（部）

源政子と黒木夫人

高濱長江

歴史は環の如く果てなくして單に繰返さるゝものに過ぎず、とせば人生の價値いづくにありや。されど悲いかな我らが日常生活の周圍には絶えず悲惨なる社會状態を在らゆる濃色彩に投影して宛ら歴史に對する此の樂天的墮落的定義を讃美し、敷衍、謳歌して止まざるが如きは抑も何故ぞ。頃者新聞の傳ふるところに依れば、黒田清仲なるものが其の別居せる實母瀧子を被告として法廷に訴ふるや、薄命なる被告——黒田伯爵未亡人は事の吾身に非なるを知りて遂にその最愛しき幼女を連れつゝ躬親しく幼女の後見たるべき養育者たるべき黒木邸に到りて後事を托するに至りぬと。事件の梗概は只之れのみ、然り民法の保證に依りて斯くなるべきは當然の結果にして敢て何らの奇あるなし。されど翻つて仔細に之れが裏面に思ひ到りて洶湧たる人情の波瀾を窺ひ見なば、蓋し世に未だ論せられずして

而かも尚ほ我らに多少の教訓を與ふるものなきにあらざるべし。されど余は今は未亡人の別居するに至りたる近因遠因の如きは暫く措て問はず、蓋し木偶と等しき幇間勅任某の如き論ずるに遑あらざれは也、只吾人は世にも薄命なる未亡人が其の最愛しき幼女と愈々訣別せねばならずと決心せしより黒木邸を辭するに至りたる其の間のドラマ的光景を偲ばんと欲するに過ぎざる也。

昔は靜女、鶴ケ岡の八幡宮に於て綺羅星の如き關東武者に面前にて「よしの山みねの白雪ふみわけて入りにし人の跡ぞ戀しき」と謡ひつゝ白熱的人情美を謳歌して傍ら人なきものゝ如く舞出づるや頼朝は神色忽ち變じて物をも言はず簾さしおろして「奇怪至極。」と叫びけれども、流石は政子也けり婦人の良人を思ふの情は固とよりかくあるべし豫州多年の好みを忘れて戀慕せずんば貞女にあらじ、と己れと頼朝との戀愛關係を說きて見る／＼彼れを轉頭せしめたりと、然り我が黒田伯爵未亡人が——余は敢て斯く云はむ、早晩亡ぶべ

き舊惡制度の存する間は、蓋し未亡人に對する敬語にして彼れは自ら其の位置を抛ちたるものにあらざれば也、然り伯爵未亡人が獨り孤閨に幼女を守りて熟ら世上の風波荒らく、親戚同胞の情誼紙よりも薄きに沈吟しては悲哀の紅涙止め難く、遂に反感の結果天下を擧げて爭ふとも我が此の郎君のかたみの愛子は離さじと堅く決心したるは尙ほ彼の靜女が、堂々たる天下の權威に屈せざるのみかは壯烈なる入神の一曲！宛ら鬼神を感泣せしめ、無情の梁塵をも跳梁せしめたると殆ど二致なき也。蓋し無氣力優柔なる彼ら長袖者流が一にも二にも皇室の藩屛を以て高く自ら標置し面目を重んずること頗る嚴正なるにも拘はらず遂に法廷に母子相爭はんとして一世の物議を惹き起したるに依りて彼女の決心の固かりしを察するに餘りあれば也。されど憐むべき未亡人が此の一私事の愈〻天下に暴露せらるゝに至りたるを理解しては、一たび憤激したる感情も忽ち零却し、悔悟して否な寧ろ含むところあつて愛子と共に黒木邸に走せ參じたるにはあらざりしか。

含むところとは何ぞや、斯くして從順に最愛しき幼女を渡しなば、隨時同邸にも出入して愛子撫育の萬一をも果さるべしと思へるもの即ち是れ也。

噫、されど悲いかな無慈悲なる下手人は明治の昭代（？）にも存在して彼の義經記に記せる如く「禪師が抱きたる綠子を奪ひ取り、脇にはさみ馬に打ち乘りて由井ヶ濱に馳せ出で」しばかりか此處には義姉妹の同情濃かなるべき政子夫人――黒木夫人は庖厨に言寄せて面會をも峻拒せりと、あゝ是れ憐むべき未亡人に取りては死刑の宣告を受けたるよりも苦痛にてはあらざりしか、若し夫れ未亡人にして豫め本日あるを知らば公然法廷に立ちて、古來權力者の橫暴を助長せんが爲めに惡用し來りたる民法の無慈悲を痛論して、茲に判決例に一新紀元を作らしむべく、萬一然らずんば生きて此の屈辱に忍ばんよりは彼ら血なき涙なき法官の面前に於て、彼のルーテルが羅馬法皇の勅狀を寸斷したるが如く彼ら法官が金科玉條と稱えまつれる一卷の法律を寸斷し、返す刄におのが身は潔く自刄して寧ろ光彩

ある最後を遂ぐべかりし也。

思ふ、彼の幾度か戰場に臨んで人の子を殺戮すること草を刈るが如き黒木爲楨の如きが、斯かる一婦人の不幸、非運に相對して恰も對岸の火災を視るが如く冷過せしは敢て歯牙に懸くるに足らざれども彼の嚴きには「愛國婦人名譽會員」として愚直なる平民と力を同うして國事に奔走したる黒木夫人が憐むべき此の同性に對して一滴の涙も絞らざりしは吾人、日本婦人の婦徳を蹂躙したるものとして深く痛嘆し且つ名譽あり知慧ありと自信する夫人の爲めに恨みなき能はざる也。

人或は云はむ武士道に支配せらるゝ大將一家の風紀儼として夫人の犯べからざるものあるを奈何せむと。武士道とは何ぞや公衆の面前に於ては故ありて吾子の他殺さるゝも從容として之れを見遁せども、一たび人目を避けては「死ぬるを忠義と云ふことは、いつの世からの習はしぞ」と人道、天道併せ呪ひたる僞善道徳果して何するものぞ。若又更らに正義、恩愛兩立せざらんか何故に嫁は姑に背き、妻は夫に背くべしてふ一

大遺訓に傚はざりしか、吾人彼女に恨なき能はざる也。

思ひ起す、余往年病軀を擁して由井ヶ濱邊を逍遙しつゝ、秋の夕ぐれ暗雲天地を覆ふところ澎湃たる沖津白浪寄せては返す音響に愀々たる鬼氣人を襲ふが如く之れを感じて竊かに彼の靜女が產みし綠子の亡者となりて永劫盡きざる恨みの聲の名殘にはあらざるかと一種の淒慘禁じ得ざりしが、今亦朝夕青山腦病院の傍ら黒木爲楨の門前を通行しつゝ轉た當時を追懷して此處にも生きながらにして地獄の呵責に嗚咽の涙堰き敢えざる憐むべき小女子あるを想ひ浮かべて、慨然として暗涙に咽ばざるはなし。あゝ奸惡なる世なるかな。されど心せよ?! 錦繡華やかなる大將の深窓雪を欺くカーテンの下にも小女が夢みる母の面影は、三軍を叱咤する爲楨が名刀を擬して之れに臨むも如何とも爲し能はざる人心の妙機を心せよ。

あゝ汝等黃金に色盲し、爵位に戀々として他あるを知らざる貴族の輩よ、母子恩愛の至情だも解せざる人非人よ、人情を辨へざること然かく頑迷なればこそ、

同族千坂に淫靡類ひなき「みち子」を出せし也とは知らざるか。吾人修學時間を割愛して之れを論せしもの豈に一婦人のために將た一時のために辯せんや。

吾人は三たび繰返す、此の生きたる悲劇の一齣に於て假りに百歩を讓りて、彼ら連累者は悉く解放せんも獨り日本婦人の婦德を蹂躙しつゝ上流社會に濶歩する黑木夫人には深大なる恨みなき能はざる也と。

嗚呼夫人よ、我れは呪はず唯だ人聲絶えたる此の夜半今將さに筆を擱かんとして願くば祈らしめよ「汝が夜々の夢路を、顏色青ざめたる亡者清隆の襲はざらんことを。」（七月十七日夜）



厭世と煩悶の救濟策

（自由安樂の新社會を建てよ）

堺　利　彦

「曰く厭世、曰く煩悶、曰く自殺、悉く是れ衰世亡國の特産物にして興國大日本の今日に有るべき筈のものに非ず。而かも實は滔々として此悪傾向の大流行を示す。是豈識者の一大考量を要すべき大問題ならざらんや。」とて、雜誌「新公論」が多くの人より意見を集めたるもの載せて本年七月號に在り。予は之に對して左の答案を送りたりき。

小生等の見る所に依れば、謂はゆる「青年男女の煩悶」の根本的原因は、（彼等がそれを自覺せると否とに係はらず）獨立生活の困難（即ち職業を得るの困難、及び父兄等に對する家族關係の困難）と、從つてそれより生ずる結婚の不自由とに在りと思ふ。故に、社會全員の生活を安樂にし、結婚を自由にすれば、謂はゆる「煩悶」なるものは消滅してしまふと思ふ。されば之に對する根本の救濟法は、社會主義大革命の勢を助けて、一日も早く自由安樂の新社會を現出せしめるの外は無いのである。

然らば今差しあたり其の煩悶せる青年男女に對して施すべきの道は無いのであるか。否、それは大に在る。即ち、彼等に對して右の道理を明白に說示し、彼等をして其の苦痛を感ずる所の原因を十分に了解せしめ、而して後、自己の苦痛を免れんが爲に、及び多數同胞の苦痛を除かんが爲に、進んで此の大革命の爲に其力を盡さしめ、依つて以て其間に慰藉と希望と安心とを得せしむるのである。

茶店說と尼寺說

讀者諸君、何と奇拔な表題でせう。是は某地の或婦人より東京なる其姉の許に送られたる手紙でありますが、溢るゝばかりの其の情狀、到底平凡なる文人などの、机上の想像の及ぶ所ではありませぬ。感服の餘り、少しばかりの修正と少しばかりの小生の想像とを書き加へて、こゝに掲げる事と致しました。

堺　利　彥

都の時めける人々は避暑旅行とか申して、鎌倉、大磯、扨は箱根なんどに夏中を遊びたまふよしなるが、田舍には又田舍らしき旅行の連がありまして、谷本の嫁さん、新店のお作さん、それに德永の幸藏さんを後見なり案内なりにして、私ともに一行四人、和倉、七尾、伏木あたりを四日ばかり遊んで來ました。

旅は實に面白いものですね。脚半牲で朝露を踏みしだきながら、スタ〳〵と出かける所、先づ何だか斯う體が引しまるような、そして氣はノンビリとして、いつ此日が暮れるものやら分らぬと云ふ樣な心地がします。

それから旅の恥は搔きすてといふので、私は書生さんの冠るような經木眞田り鍔廣の帽子に、さすが女の印にチョイと赤い紐をつけてフワリと冠る、谷本の嫁さんはハイカラだけに、アメリカの弟から送つて來たといふ、例のそら日よけ帽とやらいふ、子供の兜頭巾見たような、眞白な麻布の帽子を得意で冠る、其外思ひ〳〵の扮裝は、迚も我が住む土地では出來ぬ姿でありました。

和倉で一泊して、あくる朝四時頃、皆で海岸の日の出を見て、それから半里もある石崎といふ邊まで散歩に出かけました。そこを來がけにガタクリ馬車で通りましたら、片側の山の裾に自然生の萩や桔梗の咲いたのを見ましたので、それを探しに出たのです。其時の氣持のよさ。朝露がキラ〳〵と光つて、可愛らしい花がそこにもこゝにも足元にあるのです。そして白手拭かぶつた里の女子供が、美しい聲で歌ひながら、ザク〳〵ザク〳〵と朝草苅をして居るのです。それはモウ本統に何とも云はれぬ景色でしたよ。

七尾から伏木までの汽船の中も、實に珍らしい面白い事でした。船の中には北海道行の勞働者諸君ばかり。それに就てをかしかつたのは、私等が七尾の船宿で切符を買うた時、四人兄弟だなどゝ帳面に書いたので、チョイと巡査君に不審をかけられ、北海道への駈落者

では無いかなど〻、飛んだお調べを受けました。こんな事も旅の一興ですわねえ。

それから伏木の宿では皆が旅なれたセイか大變に浮れだして、新庄のお作さんなどは手を叩いて宿の女中を呼んで『ちよいと姉さん三味線があるなら貸して頂戴、十年振に彈いて見る』といふ程の元氣でした。幸藏さんは例の『鉢の木』を三べんばかり繰返して謠ひました。其時姉さん私が何をやつたと思ひます。是だけは云はぬが花として置きませう。

伏木に義經公腰かけ石といふがありますがね、義經公が安宅の關を逦りぬけて來て、辨慶君な〴〵一しよにこゝで休息したものと想はれます。幸藏さんは矢立を取出して其石に我々一行の姓名を書つけました、直ぐに雨で消えも仕ませう、よしや消えぬにしても誰讀む人もありますまい、よしや又讀む人があつたにしても、こんな名前が並んで居たとて何處の誰やら分りもしますまいが、それでも旅行者の野心と名譽心とは聊か是で滿足せられるものと見えます。

姉さんも覺えてお居でゝせう、昔し兄さんが漢文の稽古をして居た時、文章は簡潔でなくちやイケナイ、賴山陽の著した『小文規則』といふ本の中に、韓退之が何とやらいふ寺の塔に題して、『韓退之、柳宗元、孟東野、誰やら、誰やら、同登』と書いたのが載せてあるが、此文章には人名の外に『同登』の二字があるばかりだけれど、其二字だけで既に當時の千景萬情を包括して居るナンテ、私等に講釋して聞かせた事を。私は此の義經公腰かけ石の處でフト其事を思ひだしましたよ。成程、韓退之だの、柳宗元だのと、大家の名前が幾つも並んで、塔や石に書きつけてあるのを見たならば、後の人が如何ほどそれを床しがるでせう。成程『同登』の二字だけで當時の千景萬情を想像する事が出來ませう。幸藏さんもそんな事に倣つて一行の名を書いたのでせうが、名もなき田舍の男女四人では仕方がありませんわねえ。

然し私は又斯う考へたのですよ。旅行者が其名を書きつけるのは、何も幸藏さんに限つた事はない、何處の神社佛閣に行つて見ても、必ず男女さま〴〵の人名が書殘してあるが、凡て此世に生れ來りし者、いづれも此の永劫千萬億年の間に只だ一度、僅かに五十年の一生涯を送るのであるから、如何なる匹夫野人と雖も、之を本人より見る時は、我に優れる人はなく、我に代ふべき寶はないのである。韓退之も、柳宗元も、權兵

衛も、太郎作も、幸藏さんも、私も、各々其の『我』たるに於て何の差異は無いのである。して見れば、其の『我』なるものを此の宇宙の間に殘さんと欲して、各々其名を石に錄するは、當然の事である、オホヽ、ヽ、大變な論文になりましたが、マア姉さんソウぢやありませんか。後の人がそこに行つて其の書殘した名を見る時にも、韓退之、柳宗元を床しく思うて、其の『同登』の當時の景情を想像すると同じ樣に、權兵衞、太郎作君等の名を床しく思うて、其の毛布若しくば蓙を外套として、口をアカンと開いて某寺の壯麗を贊嘆する、善良なる農夫の眞情を想像する事が出來るではありませんか。さすれば又、義經公腰かけ石に記された私等の姓名を見て、跡で床しく思うて呉れる人があるかも知れません。まさかに、此の名前の女は大分ハイカラらしいから米國製の日よけ帽を冠つて居たらうの、此の名前の女は赤い紐のついた經木眞田の鍔廣の帽子を冠つて居たらうの、此の名前の女は宿屋でチヨイト意氣な爪彈でもやつたらうのと、そこまでは想像が屆かないでせうけれど、昔し〳〵義經と辨慶とが一しよにこゝに休息したのだらうと想像する樣に、男女四人の田舍者の一行が隨分氣樂に此邊を遊びあるいた

ものと見える、などゝ想像して呉れる者があるかも知れません。

おや〳〵是は大變脇道にはいつて長文句を書き立てました。マア今日は一日暇だから幾らでも書けるだけ書きませう。是からまだいよ〳〵肝腎要の書きたい事があるのです。三間になつたつて五間になつたつて構やしませんわねえ。卷紙は十二錢のを今はじめて使ふのだから心强い。あなたは忙がしいでせうけれど、二日がゝりでゝも、三日がゝりでゝも讀んで下さい。

伏木で大變景色の善い處がありましてね、前は海、後は山、横は小川といふ、例の私の茶店說に持つて來いの塲所がありました、處が丁度そこの崖の上に小さな堂があつて、尼樣が二人川端に立つて、私等の妙な姿をジツと見て居たので、姉さんの尼寺說を思ひだして、本統にをかしな感じがしました。

是です、私が書きたいと云ふのは。足かけ六年前お互にあゝして居た時の詰らなさ。此頃世間の男の人達が、職業が無い、地位が無い、仕事が無いと云つて、ぶら〳〵遊んで困つて居るのを澤山に見かけますが、あんなのが今の世の浪人といふのでせうね。其の男の浪人も困りものでせうが、女の浪人くらゐ困つたもの

はありますまい。お互に永い間、女の浪人をしましたわねえ。女の浪人と云つちやおかしいか知らぬけれど、嫁に行かずに年を取つたり、一度は嫁入しても面白くなくて戻つて來たりしたのは、マア女の浪人と云つても善いでせう。姉さんにせよ、私にせよ、今から思へば本統に馬鹿々々しい嫁入をして、二人ともに見事に別れて戻つて來て、モウ〳〵世間並の、義理づくの、慾得づくの、味もなければ情もない、道具に使はれに行く様な、玩弄になりに行く様な嫁入は眞平だと、懲々して身寄無ひはしながらも、さりとて今の世の女の身は、矢張例の三界に家なしとやらで、いつまで此の女浪人で行かれる事かと、不安の念は常に絶えず、それに幾ら役立たずの女ぢやとて、何んにもせずにジツとして居れば、自然に餘る精力の用ゐ處なきに氣は靜まらず、幸ひに健康な此の體を、恐かでこそあれ不具でもなき此の體を、何かの用に立てる道が無いものかと、毎夜々々の語り草は只だそればかりでしたわねえ。

それから段々話の末、眞面目な様な、冗談の様な、ヤケの様な、悟つた様な氣味合で、私は茶店説を提出する、姉さんは尼寺説を主張する、と云ふ様な事でしたわねえ。あの時の私の心持では、私は迚も何と云うて世の中に出て働くほどの身ではないが、それでも幾らか世の人の爲になる、そして自分も心持のよい、面白い職業に身を寄せて、清く樂しく此の生涯を送りたいと考へたが、フト思ひついたは茶店の事。それは何時ぞや或山を越えた時、峠の絶頂に茶店があつて、白髮の婆さんが猫と二人で、草鞋と駄菓子と大福餅とを賣つて居ると、そこに炭俵を脊につけた立髮の長い馬が、シヤンガリ〳〵と鈴を鳴して峠の方から登つて來るなど、其の趣きが何とも云はれず面白く思はれたので、其の景色が繪の様に頭の底に殘つて居たのが、此時ヒヨツクリと浮んで來たのでありました。こんな事は昔幾度話したか知れぬ事ですけれど、今思ひ出してお浚へをして見ると、面白くて面白くて堪りませんので、こんなに細々と書いて見るのです。姉さんも屹度又面白く讀んで下さるでせう。

それで私は是非茶店が出して見たい、それには丁度あの峠の茶店の様なのも善いけれど、然しモ少し人通りの多い處も面白い、さりとて景色の善い處でなくては面白くない、など、様々想像を回らした揚句が、ツマリ前は海、後は山、そして横手に奇麗な水の小川があつて、景色もよく、人通りも多い街道といふ事に極

めてしまつたのでした。そして私は此の茶店で毎日々々大勢の往來の人に茶を汲んで、其の勞れた體を休ませるのを樂みに、せめて是を私が此世に盡す親切として心を慰め、あの峠の茶店のお婆さんの樣に、善いお婆さんになつて死にしたいと云ふのが、其時の私の願でした。そしてとう〳〵或日の事、お母さんと姉さんと三人で、其の茶店の場所を探しに行つた事があるではありませんか。勿論そんな注文通りの處があらう筈もなし、固より冗談半分の一日旅ではあつたのですが、それでも何となく我心の夢の影を追うて、理想を求めて歩いたのでありませう。

然し其時姉さんは私の茶店說には不贊成で、『私は茶店の姉さんなんぞになるのは厭、いつその事に此の黑髮を剃りこぼちて、高い山の、海を見晴しの、小さい庵寺の尼さんになりたい、そして朝夕看經して靜イづかに一生を送りたい』と云ふ說だつたのですねえ。若しか姉さんが本統に尼さんになつて居たら、嘸お品のよい、美しい尼さんでせうね。

私達の此夢は遂に事實にならずに終つたのですが、私は前に云つたアノ伏木の海岸の景色のよい處であの二人の尼さんを見た時には、本統にハッと思ひましたよ、自分で自分の身の果を見て居る樣な氣がしましてね。夢の中では善くそんな事がありますわねえ。若しかあの二人の尼さんが私達であつたらドウでせう。私が茶店をやる筈の處を、それも思ひどほりに行かないので、どうかいふ譯で姉さんと二人、彼處で尼さんになつたとしたらドウでせう。若し又、私があそこに茶店を開いて、赤い襷でも掛けて『入らッしやい！』などゝやつて居る、そうすると其上の山の崖の庵寺では、姉さんが尼さんになつて居て、朝夕看經の鐘の音が聞えるとしたらドウでせう。あゝこんな風に考て居ると、人の事やら我事やら、我が人やら人が我やらボンヤリとして分らなくなつてしまひます。あゝあの二人の尼さん達は、私等の夢を外の人が實行して居るのではありますまいか。

私は內に戾つてから兄さんの處に行つて此話をしました。すると、兄さんの云ふのに、『お前の茶店說と姉さんの尼寺說とを比べて見るに、お前の方がよッぽど風流で、よッぽど本統に悟が開けて居る。姉さんはあれで少々器量自慢もあるし、態と一ス子すねて尼さんなどゝ云ひだしたのだ。髮を剃るなどゝ云ふだけ色氣があつたのだ』と云ひました。姉さん怒つちや厭です

よ。是は私が云ふのではない、兄さんが云つたのですから。然し誰が云つたつて善いわねえ、お互に遠慮のない事を云ふのが面白いのだもの。

　そこで私は此の私達の昔の身の上と今の身の上とを思ひくらべて、又夢の樣な心地がするのですよ。お互に茶店のお婆さんになつて死ぬるの、尼さんになつて朽ちるのと、我と我が身を持てあました樣な事を云つたものが、思ひがけなく何時の間にやら二人とも又結婚して、姉さんは花の都で看護婦などゝといふ當世風の職務に就て、看經どころか一生懸命働いて居なさる、私は又茶店などゝは品の變つた牛乳屋で、毎日セツセと乳を搾つて居る、本統に姉さん變れば變るものですねえ。

　然し又私は思ふのですよ、私達も若い時には不仕合で、女浪人の憂さ辛さも嘗め盡したのですが、其間の苦勞が學問になり藥になつて、今では心の持方も少しは善くなり、思ひやりも明らめも附いて來たのです。それで私は矢張り獨で、大勢の人の爲に茶を汲んで、勞れた人を休ませて進せるといふ樣な心持で、毎日乳を搾つて居るのです。姉さんとても又、朝夕看經の心持で患者の世話もして居なさるのでせう。それでこそ皆な安心して務も出來、從つて夫婦の愛も自然に完くなるのです。して見ると、私達が一時色々と心に悶えて、あんな夢の樣な事を考へて居たのも、決して只の夢でもなく、又徒らの無駄事でもなく、あれが銘々の心の修業であつたのでせう。あゝ私達は幸福な身の上になりましたわねえ。

　然しまだ是から先、私達の身の上にどんな不幸が降つて來るか、湧いて來るか知りませぬけれど、よしやどんな困難苦勞に遭つたとて、今の心持で迎へて行けば、それに堪へられぬ事はありますまい。一旦我から投出して此の世の中に棄てた體を、入用あらば使ひたまへ、入用なくば差しおきたまへ、茶店の婆にもなりませう、尼法師にもなりませう、何處に往くとも其の境遇に安んじて力の限を盡しませう、私はそれで滿足です。義經公の腰かけ石に名もなき我が名を書殘されて耻ちぬのも、矢張りマアそんな樣な心持でせう。

新刊紹介

△瀬戸内海　塚越山東著　四六版二一四頁　定價三十錢
東京麴町區有樂町三の一、有樂社發行

美はしき瀬戸内海が、日本の文化に如何ほどの關係を有てるかを、地理歷史の兩面より精細に記述したるものなり。風景を詠じたる古人今人の詩歌など甚だ多ければ、中國地方に旅する汽車汽船中の讀物とするに適せり。

ik'koto ga muzukasyik nal. Kole wa doosyite mo hito no tol mae ni maz zyibun ga sole o ubatte syimawanakeleba nalanai. Koo iw kangae kala densya ni wa tobinoli senuba nalaz, tobinotte asyi omo butskeneba nalaz, hikikolosale sokuaw yoo na me ni mo awanakeleba nalanai no da.

Keledomo yok kangaete mil to, dale mo kale mo minna koo iw hunto-seekats o yal no de sasyihikeba tsumali zelo ni nal. Abnai me o mitali kowai omoi o syita dake ga honeoli-zon no ktabilemooke ni nal no da.

"Isogazba nulezalamasyi o, Tabibito no, Ato yoli halul Nozyi no Mlasame!" Ame ni wa nulete mo aluk mitsyi ga skosyi demo hakadoleba mata gaman mo dekil keledo, hitots tokolo de issyookemmee ni zyidanda o hunde ame ni nulete ite mo nekkala ki mo kikaz, yak ni mo tatan syidai de wa nai ka? Ningen doosyi osyinoketali tskiotosyitali syite ilu hima ga al nalaba sono ningen tatsyi ga kyoodoosyite, ki o awasete, motto nani ka ki no kiita ii koto ga dekil ni tsyigai nai. Densya no kaisya to soodansyite nolikaez ni sum yoo ni mo dekiyoo syi motto klma no kaz o ook syite laku ni nolel yoo ni mo dekil daloo.

Kyoosoosyite, iyana omoi o syite, see o kitte, sosyite minna hakaba e to kakekkla o syite ilu no da. Iyana yo no yuk alisama de wa nai ka?

Kazu no Kakikata.

Uyemura Tatsuyo.

Watakshi ga Zengō no Katei-Zasshi no Rōmaji-Ran de Kazu o arawashita naka de "一つ" to iu Kazu o "Hitotsu" to Kaita. Sōshite mata "五つ" to iu Kazu o "Itsutsu" to Kaita ga ato de Kigatsuite miru to Dōmo Kono Kakikata wa Fjūbn de atta to omoware ta.

Kazu o arawas no ni Kayō na Kakikata wa jits ni Wazrawasik Fmeiryō no, Kirai wa naidarō ka?

Kangaete miru ni Kayō na Kakikata de wa hitome mite Kazu no Seisitsu ga Wakarikaneru. Korewa Zehitomo Kantan ni Meiryō ni Hitome mita bakari de Sono Kazu no dai syō ga wakaru yō ni sitai to omowta.

Sorede tsugi no yō ni Kaita naraba Kaku tesuw mo habke te yomiyasku Kantan de Meiryō de sono ue ni hayawakari ga suru.

一つ	Hitotsu	1^{ts}
二つ	Futatsu	2^{ts}
五つ	Itsutsu	5^{ts}
三十	anjū	30^{ts}
百	Hyaku	100^{ts}
百七つ	Hyaku Nanatsu	107^{ts}

Mata Samazama no Meisuw(名數) wa tsugi no yō ni kaita naraba hanahada benri to omow. Tatoeba

米五升	Kome 5^{shō}
人百人	Hito 100^{nin}
布三尺八寸	Nuno 3^{jak} 8^{sn}
綿三貫五百匁	Wata 3^{gan} 500^{monme}
十月十五日	10^{gats} 15^{ch}
三月八日	3^{gats} 8^{ch}

Korewa Watakshi ga nochi ni Kangaetsuita koto de aru ga Rōmaji no Kazu no Kakikata oyobi arawashikata ni tsuite Koreyorimo Nao Kantan de Meiryō de benri no Kakikata ga arimas naraba Nanitozo Kono Rōmaji-Ran made Towsho Site Kdasaru Koto o Setsu ni Nozomi mas.

第四巻（五〇三）
第九號（五五）

RÔMAJI RAN

Isog Kse.

Hkao Syoo.

"Isogazba nulezalamasyi o, Tabibito no, Ato yoli halul Nozyi no Mlasame!" Kono uta wa dale demo yok syitte ilu uta da. Mkasyı kala ningen to iw mono wa yoppodo isogitai mono to miel. Sole dakala kono taisetsna inotsyi no tabi made isoide dondon kan-oke no naka ni tobikonde syimaw yoona koto ni nal no da.

Atsklusyii, kaze no nai, yuugata niwa watasyi wa its mo hlahlato ie o samayoidete hodotsyikai Hanzoomon no holibata no yanagi no ki no syita e itte suzum no ga tsune de atta. Soko wa tsyoodo densya ga samboo ni wakalete ilu tokolo de Hibiya-kooen ya Syinzyik kala kite Kudan-zaka ya Itsyigaya no hoo e iku okyak wa doosyitemo nolikae o syinakeleba nalanai yoo ni natte ilu. Watasyi wa monozki nin.o sono nolikaeba de noli-oli slu hitobito o nagamete ilu no ga daiski desyita.

Al ban mo yahali soko de itsmo no yooni mite imas to nolikae-kippu o motta hito ga dono hito mo dono hito mo samo isogasyige ni kakete itte wa tsgi no densya ni nolu. Sono yoosu ga isyi ni han o osyita yoo ni natte ilu okasyisa!

Kudan no hoo kala kita hitoli no heesyi wa sono klma kala olil to sug batabata to kakete itte tsgi no ni nolikaeta ga ammali isoida no de Kanda e ik beki no o Tskizyi yuki ni notte samosamo kimali wal soo na kao o syite atama o kakikaki olite kita.

Syinzyik kala kita wakai otoko wa ima deyoo to syite ilu Itsyigaya-yuki ni tobinotte agaliktsyi ni asyi o batskete haahaa itte itagatte ilu. Tskizyi kala kita obaasan wa leel o yokogitte Itsyigaya sen e koyoo to syite ato kala kita densya ni hikikolosalesoo ni nali, inotsyi kalagala moetsuk yoona hagesyii bel no oto o nogalete kolob yoo ni syite kakete itta.

Ato kala, ato kala to densya wa syikkilinasyi ni kul. Mae no ni nolenakeleba sug tsgi no ni nolu koto ga dekil no da. Sole o ima nolioklete wa milai eegoo nolu koto no dekinai mono demo al ka no yoo ni muyami yatala to isog hito no ki ga doosyite mo syilenai.

Ima no yo no hito wa "Kyoosoo" to iw omoi byooki ni kakatte ilu no da. Itsyi nimo kyoosoo, ni nimo kyoosoo, kyoosoo de nakte wa yo mo hi mo akenu to iw syimats de al. Kyoosoo to itte mo sole ga gakmon no kyoosoo toka nan toka iw no nala mada ii ga sono kyoosoo ga kotogotok seeson-kyoosoo, snawatsyi klasyite iku koto no kyoosoo, syokmots dano kimono dano no kyoosoo, da kala iya ni natte syimaw.

Zyibun ga tolanakeleba hito ni tolalel. Sooslu to zyibun no ikite

家庭雜誌第四巻要目

第一號（一月一日）

△理想の影（詩）△我輩の家庭主義（堺利彦）△眞心のお年玉（安藤生）△婆アの皮（深尾韶）△臺所廢止論（中尾傘瀬）△動物虐待税（祿亭生）△花言葉（久田二葉）△日本服の將來（韶）△炬燵雜談（堺の上の柿、エスペラント語、男子中心の態度）（彦）△老父母を迎ふるの記（西村渚山）△北海道の冬の生活（韶）△ローマ字欄等

第二號（二月一日）

△死にゆく母に代りて（詩）△醜惡なる家庭（深尾韶）△謎の指環（西村渚山）△滑稽の研究（中尾傘瀬）△火の中に住むの記（竹内余所次郎）△婦人と園藝（久田二葉）△春の料理（石井泰次郎）△火州庵小信（まがりかは生）△炬燵雜談（旅行の利益、宿屋と我家、能樂見物、狂言「釣針」、家庭の厚氷、嫁さんの盗み食、女天才の束縛、柔順の美德？、傍若無人の言、革命的戀愛）（彦）△雪姫物語（上）（白柳秀湖）△ローマ字欄等

第三號（三月一日）

△僕の夢（彦）△婦人と經濟的平等（堺利彦）△春雨日記（ふかを生）△反抗の聲を擧げよ（深尾韶）△女子の威嚴に就いて（中尾傘瀬）△家庭時言（久田二葉）△臟器料理（大石祿亭）△炬燵雜談（異人種結婚、金子コンガー夫人、波蘭の珍客、慾詐は侮辱なり等）（彦）△思ひも寄らぬ便り（安藤曲川）△初春の草花（二葉）△雪姫物語（中）（白柳秀湖）△春の料理△ローマ字欄

第四號（四月一日）

△生涯幾度の花（利彦）△貞女道を批評す（中尾淸太郎）△鳩と社會主義者（堺利彦）△聖書と婦人の權利（山口孤劍）△春日郊行の記（堺利彦）△余は寧ろハイカラ女學生を取る（目黒の里人）△我等の胃袋（上司小劍）△日本服論（竹内余所次郎）△新案料理數品（大石祿亭）△西洋の野遊び△雪姫物語（下）（白柳秀湖）△人不知（小說）（堺利彦）△夫に家庭雜誌を讀ませる法△貧と愛情（西村渚山）△ローマ字欄

第五號（五月一日）

△春愁（利彦）△故山の情話（上）、堺利彦）△日本婦人の貞操を疑ふ（中尾傘瀬）△貧者の心得（大石祿亭）△わが從妹の將來（久田二葉）△なまけ者の福音（白柳秀湖）△人情なき教育者（安藤曲川）△老友の詩（堺利彦）△猫の爪（小說）（西村渚山）△婦人新論（第一章）（堺利彦）△日米結婚の新家庭（金子喜一）△聖書と婦人の權利に就て（中尾傘瀬）△本誌の寄書家△チラシ配り（やす子）△ローマ字欄

第六號（六月一日）

△自然の保險（利彦）△ハルマン翁の入獄（堺利彦）△ハルマン翁の學說（堺生）△米國に於けるゴルキー（金子喜一）△ゴルキーと米人の僞善（幸德秋水）△女學校に交際科を設くべし（中尾淸太郎）△菜食主義（幸德秋水）△菜食主義に就て（堺利彦）△登山の感（中尾傘瀬）△父の婚禮（上司小劍）△墓場の教訓（月の輪）△此頃の草花（久田二葉）△飮料種々（大石祿亭）△大塚若太郎の朝飯（堺利彦）△酷遇されたるゴルキー（金子喜一）△家庭と養蠶△ローマ字欄

第七號（七月一日）

△棗と秋海棠（彦）△磯谷家の最後（西村渚山）△菜食論（一）（加藤時次郎）△暗汁會の記（蓮葉生）△田園より（久田二葉）△育兒所感（中尾淸太郎）△鴉の子（上司小劍）△二箇の犧牲（荒畑寒村）△同病相憐の記（上）（有隣生）△屠牛を見る（堺生）△自殺せんとしたる女學生に就て（中尾傘瀬）△眞ア坊のお友達（眞子）△米國の農園勞働（延岡常太郎）△現實の理想鄕（深尾韶）△菜食主義に就て（堺生）△ローマ字欄

第八號（八月一日）

△安き眠（彦）△古山の情話（下）（堺利彦）△兒童教育の基礎（久田生）△茄子の苗（上司小劍）△家庭問題の根本的解决（深尾韶）△跛の娘（白柳秀湖）△婦人は何故に不淨なるか（中尾淸太郎）△菜食實行法（大石祿亭）△同病相憐の記（中）（有隣生）△菜食論（二）（加藤時次郎）△軍人崇拜熱と當今の女子（赤羽生）△新刊紹介△由分社より△ローマ字欄等

本誌代價	一部 金十錢 六ヶ月前金五十五錢 一ヶ年前金壹圓 （何れも郵税共）
廣告料	特別一頁 十圓 普通一頁 七圓

▲本誌は毎月一回（一日）發行とす。

▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵券代用ならば五厘切手で一割増に願ひます。

▲御注文の時は必ず何巻何號より何號まで何册の前金と明瞭に御記載を願ひます。

▲御手紙には必ず住所姓名をハツキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。

▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。

▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付四錢づゝの郵税を申受けます。

明治三十九年八月三十日印刷
明治三十九年九月一日發行

東京市麹町區元園町一丁目廿七番地
發行兼編輯人　堺利彦

東京市京橋區日吉町十番地
印刷人　中村彌助

東京市麹町區元園町一丁目廿七番地
發行所　由分社

大賣捌所　上田屋　良明堂　東京堂　東海堂

飯倉四ッ辻 飯倉支店 電話新橋一五七四番
赤坂表一丁目 赤坂支店 電話新橋二〇六八番
四谷大通り 四谷支店 電話番町五一〇番
牛込神樂坂 神樂坂支店 電話番町六三〇番
本郷一丁目角 本郷支店 電話下谷七二番
神田須田町 須田町支店 電話本局二〇七三番

帝國貯蓄銀行

銀座一丁目河岸通り
（電話新橋）八一六番 二八〇八番

兩國米澤町 米澤町支店 電話浪花二五九〇番
淺草吾妻橋通 吾妻橋支店 電話下谷七三番
南品川一丁目 品川支店 電話新橋一一三九番
横濱吉田町 横濱支店 電話横濱一三〇四番
日本橋坂本町 代理店 田中銀行 電話浪花二四〇番

此清心丹は全國到る所にあり

ニッケル罐入にてポケット用に適す

清心丹

清心丹は四季欠くべからざる懐中要薬にして心神の鬱憂を散じ食物の消化を補ひ風土変りて水あたり船車の不快等に卓効あり





東京市元大坂町
高木與兵衛

旅行又は平常携帯に便利


御用諸學校
S.A TRADE MARK
ANDO-SHOTEN
No. 5 Urajimho-cho KANDA. TOKYO
SA
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
二重枠ラケット一組
一號品 一二、五〇〇
二號品 一一、〇〇〇
三號品 八、八〇〇
四號品 七、四〇〇
五號品 六、七〇〇
六號品 五、七〇〇
七號小學用 四、七〇〇
八號婦人用 六、〇〇〇
九號婦人用 七、〇〇〇
体育用品
東京神田裏神保町五
S.A.安藤商店
電本484
ピンポン室內テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、八八〇
改良テニスネット
一號一張四間半 一、七五〇
二號一張五間半 二、二五〇
三號一張六間 二、四五〇
四號一張七間 二、九五〇
ゴム入フートボール
二號一個 四、〇〇〇
三號同 四、五〇〇
四號同 五、〇〇〇
五號同 五、五〇〇
六號同 六、〇〇〇
七號同 六、五〇〇
八號同 七、〇〇〇
體操遊戯器械一切
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四百八十四

後附五

「社會主義研究」廢刊

△『社會主義研究』は第五號限りにて廢刊いたします。理由は申す迄も無く賣行が少いからであります。雜誌を出して見て、經濟上の維持が出來ぬ場合には、世間にそれ丈の需要のないものと見て、廢刊するより外はありません。然し小生は『研究』の五冊に於いて、少しく自ら學ぶ所ありたる事と、又聊か日本社會主義文書の數量を加へた事とを以て、獨り竊かに滿足するのであります。

△小生は今この廢刊に際して、少數なる『研究』の讀者諸君、殊に種々奬勵の言葉を寄せられたる諸君に對し、及び『研究』編輯の爲に多大の助力を與へられたる、白柳秀湖、大杉榮、志津野又郎、深尾韶の四君に對し、深厚の謝意を表す。

△『研究』の五冊中に收めたる材料は、他日之に整頓を加へ、更に他の多くの材料を合せ、一部の稍大なる社會主義書として發行する積りであります。但し其時期は豫約いたしませぬ。又小説『木芽立』は遠からず全部を譯了して、單行本として發行する筈であります。

八月十五日　堺利彦

家庭雜誌第四卷第九號　明治三十六年四月五日第三種郵便物認可　明治三十九年九月一日發行

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店